磯野秋渚鈔録

美文集英

生成舍發行

特71
795

美文集英の序

心に思ひ浮ぶるとありて、これをそのまゝに筆に上して成る、眞文とは是れなり。人苟くも文を作る、誰か其眞文なることを欲せざるものあらんや、しかるに、世に虚偽の文のはびこるを、いかにせん。虚偽の文のはびこるは、心にもなきことを述べたがるからの過ちなり。淺薄なる思想を、飾り氣多き字句にてごまかすもあり、險難なる口調もていばるもあり。惡むべく、又憫れむべき所行とやいはまし。

初學の士の文に志すもの、動もすれば、其七つ道具として、飾り氣多き字句や、險難なる口調やを集載したる物の本、即ち昔ならば文語碎金風のものを座右に離さず。一篇の文章を作らんとするに當りては、先づ其文思の如何をこれ問はずして、却りて小面憎き字句を、あれやこれやと拾ひ集めて、この位むづかしき字句がならべてあれば、人に示しても愧づかしかるまじと謂ふを常とす。されば文章日に小ましやくれて、文思は日に墮落し、虚僞のものゝみ世にはびこる。書肆の時好に投じて。

其類の本を出版するもの、近來殆んど其底止する所を知らざらんとする傾きを生じ、狡猾にして無識なる、下司根性の原稿屋は、吾も〳〵と、體裁を變へ題面を改め、文語碎金風のものを拵へること、飯の上の蠅よりもうるさし。

予は、此間に處して『好尚堂文話』を著はし、今の所謂漢字減少論を尚び、一世の風潮に抗して、獨り自から高くとまれど、世人は此を見向きもせずして、相變らず彼の虚僞文章の元入れにのみ汲々たり。

此際に立ちて、友人磯野秋渚君の輯成したる『美文

集英』世に出でんとす。予は『好尚堂文話』の著者として、前論の主張者として『美文集英』の序文つくる資格は何處を搜しても發見し得べからざるなり。

然れども、秋潴君の今の文壇に立てる位附は、世に定論あり。予は、かの原稿屋をこそ仇敵視すれ、多年の交際に、文章上の益を受くる、わが秋潴君其人を以てして、今日此篇を公けにする、自信あり、抱負あるとは、予、其證人に立つことを敢てするなり。

明治三十三年六月一日　木崎好尚

美文集英のはしがき

一、書かまはしきことありても、それを表現すべき材料少きに苦むは、初學びの人の常なり。おのれこれを救はゝやおもへる折から、木崎好尚、角田浩々の二子と打語ひて、偶々この事に及びしに、二子も、はやくよりその心がまへありて、日頃讀みつる古今の書中より、錦句繡語とおぼしきを拔穗して、手箱の中にをさめてありといふ。おのれ思ふに、物は一色なるよりも、三いろなるが麗しく、一人の撰みよりも、三人の撰みたるを集めむ方、くさ〳〵の好み

に行きわたりて、用ゐむ人にたより好からむとて、やがて、我が志を二子に告げて、その扱穂したるを請ひしに、二子敢て拒まず、いたくおのれが志を賛して、おの〳〵惜し氣もなう出して、おくられつ。三人ともにいひ合さねど、同じ意のありしぞをかしかりし。おのれこれを序でゝ、茲に、美文集英は成りぬ。

一、書中、收めたる所は、王朝文あり、近古文あり、時文あり、漢文直譯あり、歐文翻譯ありて、體においては、一定する所なし。採りて用ゐむ人の、心々に任するなり。

一、類句を分ちて、十門とす。

一、季節　春夏秋冬節序の變遷
二、天象　日月星辰雨露霜雪風雨等
三、山水　山川海壑都鄙田圃の類
四、居處　神社佛閣殿堂樓亭林庭の類
五、人生　名譽隱逸德量婦道教育師弟別離會遇讀編慶弔の類
六、游覽　尋幽探勝の類、山水門と共に通看すべし
七、嗜好　讀書詩文琴棋書畫酒茶其他百般の遊戯等
八、戀愛　父子兄弟姉妹夫婦男女間の愛情

九、花木　樹竹花草麻麥の類

十、禽獸蟲魚

事にあたりて要する語句を、この中に求めむには、大抵得ざることなかるべし。

明治三十三年五月二十二日の夜、浪花の古農芳南樓にて秋鶏の聲を聞く〳〵しるしぬ。

秋渚生

美文集英

季節

秋渚生鈔錄

春風扇和鶯を伴ひ花に醉ふ▲春豔一たび發するに及んでは色は嬌に香は誇る▲風騷遊春▲烟靄朦朧として月は窓罅を窺ひ情、旅況を訊ふものあるが如し▲時方に春なり花酣に草媚び鳥は樂み人は嬉ぶ▲春雨其濛にして點滴聲あり蕭寂殊に甚れし▲春風至れば甘雨降りて萬物を生育す▲春氣發して百草生ず▲陽氣始めて施き萬物始めて動

く▲餘寒人を痺しむ▲時は中春にありて陽和方に起る▲今春氷霜早く解けて天氣和暢なり▲候陽春に属して百花亂發し風色明媚なり▲雲淡く風輕き候▲青霞起つて天を照す▲暉景既に墮ち晴霞天に亘る▲春且に盡きんとして時氣熟に向ふ▲嬉しきは年の始めにしがヒ▲年立ちかへるわしたの空の景色なごりなく曇らぬうらゝげさには數ならぬ垣根の内だに雪間の草若やかに色づきそめいつしかと氣色だつかすみに木の芽もうちけぶりおのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし▲年もかへりぬうらゝかなる空に思ふことなきありさまはいとめでたし▲花の木どものけしきばむものこりゆかしく▲今日は子の日なりけりげに千とせの春をかけて祝はん▲遥かに霞みわたり

て四方の梢そこはかとなく烟りわたれるはいとよくも似たるかな▲日もいとながきにつれ〳〵なれば夕暮のいたうのすみたるに紛れてかの小柴垣の下に立ちいづ▲京には友まづばかり消ぬのこりたる雪山ふかくいるまゝにやゝふりつみたり▲雪のふりつもれるに吾がすむかたをみやれば霞のたゞに木末ばかり見ゆ▲空のけしきも又げにぞ哀しげがはに霞みわたれる夜になりてはげしう吹き出づる風のけしきまだ冬めきていとさむげに▲月おぼろにさし出でゝ池廣くやまこぶかきわたり心細げに見ゆるにも住みはなれたらん岩ほのなかおぼしやらる▲二十日あまりの月さしいでゝこなたはまださやかならねど大かたの空をかしき程なるに▲夜ふけゆく風のけは

ひ冷かになりふしまちの月はつかにさし出でたるこゝろもとなしや▲月は夜ふかうなるまゝにひるよりもはしたなう澄みのぼりて▲有明の月いとをかしう花の木ども〳〵盛りすぎてはつかなる木陰のいとおもしろき庭にうすく霧わたりたるそこはかとなく霞みあひて秋の夜のあはれにおほくたちまされり▲明けゆく空はいとといたう霞みて山のとりどもそこはかとなくさへづりあひたり名もしらぬ木草の花ども色々に散りまじり錦をしけると見ゆ▲今日はとぢむる霞のけしきもあわたゞしくみだるゝ夕風に花のかげいとゞたつことやすからで▲日いとよくはれて空の氣色鳥の聲も心ちよげなる▲彌生の十日のほどなれば空もうらゝかにて人の心ものびものおもしろき

折なるに●天日人に逼りて烈炎赫々たり▲梅霖新に晴れ畏日燬くが如し楊を松邊に移して書を讀む▲月白く風涼し▲赤日西に傾き水風涼を送る▲午睡一响曦景將に三時ならんとす▲霖雨方に息み暑氣將に張らんとす▲夏熱頗る輕し▲炎溽人に切なり▲炎暑薫赫▲赫炎燻熇▲青天湛然として旱氣轉た甚だし▲蒸暑常に異り▲毒熱にして汗を揮ふ▲靈陽人を炙き背汗盎然たり▲雲は奇峯を聳かす▲火雲方に熾なり▲火雲山の如し明日の熱知るべし▲蒸鬱未だ解けず▲季夏以來雨澤降らず▲旱既に甚だし▲赫日輝を流す▲人々空を仰いで雲霓を望む▲夜來の一雨積暑を洗ひ去る▲晛に急雨ありて頗る涼し▲雨松柏に映じて玉塵の散飛するが如し▲晚涼水の如し▲龍神職を致し

雷雨期に應ず▲涼爽秋の刻し▲苦雨秋よりも慘なり▲卯月ばかりに花散る里をおもひいづ▲おはきなる松に滕のさきかゝりて月かげになびきたる風につきてさと匂ふがなつかしくそこはかとなきかをりなり橘にはかはりてをかしければ▲さみだれの空めづらしう晴れたる▲長雨例の年よりもいたくして晴るゝ方なく徒然なれば▲いたく更け行くまゝに濱風すゞしくて月も入り方になるまゝにすみまさりてしづかなる程に▲雨はやみて風の竹になるはゞ花やかにさしいでたる月かげをかしき夜のさまもしめやかなるに▲夕立してなごり涼しきよひのまぎれに庭のかなたこなた歩みつゝ▲花橘のかげにいときはやかに見ゆるかをりも追風なつかしければ千世をならせる聲もせなんとまたるゝはゞに俄にいづるむら雲のけしきいとあやにくにておゞろ〳〵しう降りくる雨にそひてさとふく風にとうろも吹き飛ばして空くらき心ちするに窓をうつ聲なゞめづらしからぬ古言を打誦するをりから▲中川のわたりなる家なんこの頃水せきいれてすゞしきかげにはべるときこゆ▲ゐなか家だつ柴垣して前栽なゞこゝろとゞめてうゑたり風すゞしくてそこはかとなき蟲の聲々聞えて螢繁く飛びまがひてをかしき程なり人々わたゞのより出でたる泉にのぞきゐて酒飲む▲風はいと能く吹けども日のゞかに陰りなき空の西日になるはゞ蟬のこゑなゞもいとくるしげに聞ゆれば水のうへ無德なる今日のあつがはしさかな無禮の罪はゆるされなんやとてより伏す▲

皆いと涼しき勾闌にせなかおしつゝ▲夕つけゆく風いとすゞしくて歸り憂く若き人々は思ひたり▲篝火どものかげの遣水の螢に見ゑまがふもをかし▲階のもとの薔薇けしきばかりさきて春秋の花ざかりよりもしめやかにをかしきはどなるに打とけあそぶ◎秋暑猶赫たり衣を解いて盤礴し枕席して臥す▲秋宵澄清月に棹し笛を弄す▲温風未だ爍せざるに清風おのづから至る▲秋暑殊に未だ艾まず▲秋熟甚だし▲秋暑人を蒸して居るもの月に喘ぐ▲皆茲の餘熱を履む▲秋風益す高く暑氣益す衰ふ▲秋夜氣佳にして景清し▲天宇澄鮮にして纖雲褰開す▲六合朗曠爽然として快いかな▲秋色澈く佳なり▲天高く氣清し▲秋高く氣爽かなり▲秋碧空に浮ぶ▲清氣人骨に入る▲秋に入つて稍く清涼を得たり▲火流れて清風寒し▲清風自ら生じ翠烟自ら留る▲秋風颯然たり▲颯々として涼風の座間に來るあり▲涼風至り白露下る▲風露凄然▲秋露珠の如し▲露氣冷然として人に逼る▲露下つて冷骨髪に透る▲秋氣已に半ばにして霜露方に始む▲霜露慘々として交々下る▲秋氣既に下つて衆林皆贏る▲季秋霜始めて降る▲霜露愈よ凄まじ▲霜氣秋に横はる▲秋日凄々として百卉具に腓む▲風物凄緊▲風悲み氣肅る▲霜以て物を挫く▲霜氣倍す厲し▲霜沍將に甚だしからんとす▲秋になりぬ初風涼しく吹きいでゝせこが衣もうら淋しきこゝちす▲五六日の夕月夜はとくいりて涼しく陰れる氣色荻の音もやうやうもの哀れなるほどになりにけり▲都にはま

だ入りたゝぬ秋のけしきを音羽の山ちかく風のおともいと冷かに槇の山邊もはつかに色づきて▲秋風谷よりはるかにふきのぼりていと肌寒し▲あけゆく空もはしたなくて道のほゞいと露けし▲夕暮のしつかなるに空の氣色いと哀れに前栽かれ〳〵に蟲の音も鳴きかれて紅葉のやうやう色づくほゞ繪にかきたるやうに面白きを見渡して心より外にをかしきまじらひかなと昔のことゝも思ひいづ▲秋の花を植ゑさせて常の年よりも見ごろ多く色草をつくしてよしある黒木赤木のませをゆひませつゝ同じき花の枝さし姿朝夕露の光も世の常ならず玉かとかゝやきてつゝくり渡せる野邊のいろを見るには又春の山もわすられて涼しう面白く心もあくがるゝやうなり▲秋の花皆衰へつゝ淺茅が原もかれ〳〵なる蟲の音に松風凄く吹きあはせて琴の音も聞きわかれぬほゞにものゝ音どもたゞ〳〵きこえたるいとをかんなり▲曉がたに風すこし濕りて村雨のやうにふり出づ▲霧いたう降りてたゝならぬなさけなり▲むかしの人も哀といひける浦の朝ぎり隔りゆくまゝにいとものかなしくて▲月かげばかりぞ八重葎にもさはらずさし入りたる▲月のいと花やかにこよひは十五夜なりけりとおもひて▲みちのほゞも四方の浦々も見わたして思ふうち見まはしき入江の月かげにもまづこひしき人を思ふ▲十五夜の月面白うしづかなるに昔のことかきくづし思ひいづ▲秋の夜の月影すゝしき程いとおく深うはあらで蟲の聲にかきならしあはせたるほゞけぢかうい

まめかしきものゝ音なり▲月のあかき夜桂のかげにかくれて▲かゝる夜の月に心やすく夢見る人はあるものか▲月見るよひのいつとてもものあはれならぬはなき中に今宵の新なる月の色にはげに猶わが世の外までこそよろづおもひながさるれ▲妻戸をおしあけてまことは此そらをみていかでかこれを知らずがほにてはあかさんとよにんなる人まねにはあらでいとゝあかし難くなりゆく▲菊いと面白くうつろひわたりて風にきはへる紅葉のみだれなどあはれとげに見られり▲秋になりゆけば空のけしきも哀れなるを門田の稻かるとて處につけたるものまねびしつゝわかき女どもは歌うたひきようじあへり

●玉屑淅瀝として落ち泥濘滑達たり水樹は模糊に嶠嶂は顯晦し銀圃瑤林珠簪粉障儼たる一幅の圖畫なり▲形雲濛漠として夜に迄るまで開かず▲時正に臘月なり北風其れ涼く奇寒骨を割き天月明晦にして雲と吐呑し寒犬豹鳴し行人稀少にして復た隻影を見ず▲月黑く風寒く霜威膚を襲ふ▲時正に嚴冬に入れり▲仲冬已に至つて寒氣凝り成す▲天凝り地閉ぢ風厲しく霜飛ぶ▲大寒既に至り霜雪既に降る▲大寒雪ふる▲大雪寒凍▲快雪時に晴る▲雪瓊樹を開き氷瑤地を作す▲玉雪花を開く▲六花瑞を呈す▲瑞雪頻りに降りたり來年必ず豊ならん▲時雪遂に降る實に豊穰の嘉瑞▲上天雲を同じうし雪を雨らすこと霏々たり▲雪虐風饕▲晨風凄くして激冷し夕雪暠うして路を掩ふ▲雨雪の朝風月の夕▲朝明夕晦▲陰陽積んで寒暑を成す▲四時遞に來つて歳を卒ふ▲日月

前に相代はる▲日月逝きて歳は我と與にせず▲歳忽々として遒り盡く▲歳云に莫る▲歳月居らず時節流るゝが如し▲今日ぞ冬立つ日なりけるもしるくうち時雨れて空のけしきいと哀れなり▲庭の木立池のかたなど窺けば霜枯の前栽繪にかけるやうにおもしろく▲時雨打して物哀れなる暮つ方▲風あらゝかに吹き時雨ざとしたる▲折しりがはなる時雨うちそゝぎて木の葉さそふ風あわたゞしく吹きはらひたるに▲初時雨いつしかとけしきだつに▲いみじう霧渡れる空もたゞならぬに霜はいと白うおきてまことのけさうもをかし▲霜のいとこちたうおきて松原も色まがひて萬の事そゝろ寒くおもしろさもあはれさもたちそひたり▲月さし出でゝ薄らかに積る雪の光にあひてなかゝいとおもしろき夜のさまなり▲雪のかきくらしふる終日ながめ暮して世の人のすさまじきことにいふなるしはすの月夜の陰りなくさしいでたるをすだれ巻き上げて見るにむかひの寺の鐘の聲枕をそばだてゝ今日もくれぬとかすかなるをきゝて▲四方の山の鏡とみゆる汀の氷月かげにいとおもしろし▲雪あられがちに心細さまさりて▲空のけしきはげしう風吹きあれておほとなぶら消ゑにけるをともしつくる人もなし▲からうじて明けぬるけしきなれば格子手づからあげてまへの前栽の雪を見る踏みあけたる跡もなくはるゞとあれわたりていみじうさびしげなるにふりいでゝゆかんともあはれにて▲松の雪のみ暖かげにふりつめる山里のこゝちして▲雪のしづくにぬれゝて▲冬になりて雪ふりあれた

る頃空のけしきもことにすごくながめられ▲霜月ばかりになりぬれば雪霰がちにて外には消ゆる間もあるを朝日夕日をふせぐも蓬葎の陰にふかう積りて越の白山思ひやらるゝ雪の中にいでいるしも人だになくてつれ〴〵とながめつ▲雪かきくらしふりつもる朝▲雪のいたう積りたるうへに今も散りつゝ松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕ぐれに▲しをたれたる前栽のかげ心苦しうやり水もいといたう咽びて池の水もねもいはずすごきに童子おろして雪まろばしせさせつ▲くれぬれば心もそらにうき立ちていかで出でなんとおぼすに雪かきたれてふる▲あじろは人さわがしげなりされど氷魚もよらぬにやあらんすさまじ▲なるけしきなり▲まだ夜深きほどの雲のけはひいと寒げなるに人々聲あまたして馬のおとさこゆ

天象

煙起りて暝く月升りて明なり▲月色皎朗にして瀛氣水の如く清颸徐徐と樹間に起る▲月は松梢に昇りて籟は枝間に涌き冷翠人に逼り爽氣榻に滿つ▲時正に夜半四顧闇黒にして陰風水の如く鬼氣人を襲ふ▲夜は半に參し陰風地を捲き冷氣骨に透り毛骨森竪し終夜睫を交ふると能はず▲電燈煌焉として不夜城に入るが如し▲彼の蒼たるものは天なり▲天の蒼々たるはそれ正色か▲懸象著明日月より大なるは

なし▲日出でゝ三竿黄色赤暈なり▲煙消ゆ日出づ▲忽焉として風止み雨収り日光爛然たり▲返照已に収り瞑色四もに合ふ▲日落烟収り長空皦然として絶えて纖翳なし▲日已に没して月林端に出づ▲日已に暮れ春月天に在り天色朦朧たり▲松月窓に當りて高山望に在り▲月色豊の如く極めて凉し▲一輪氷の如く松樹の間に突出す▲秋月皎々として一天に雲なし▲風恬かに月朗かなり▲天に纖雲なく月色奇甚し▲仰いで月の樹間に躍るを見る▲月華的皪として衣袖の間に散落す▲長烟一空皓月千里浮光金を躍らし靜影璧を沈む▲星斗爛然▲天油然として雲を作し沛然として雨を下す▲雲氣四もに起り大雨傾注す▲怪風劇雨▲盲風怪雨▲風雨齊しく起り林木皆鳴る▲前山風起り雲馳す▲鬱雨人を困しむ▲幽岫雲を含む▲冷然として風ふき颯然として雨ふる▲煙霏び雨散る▲雨點猶餘飛す▲空は墨をすりたるやうにて日もくれにけり▲雨にはかにおどろ〳〵しう降りてかみいたうなりさわぐ曉▲なは雨風やまず神なりしづまらで日ごろになりぬ▲神のなりひらめく樣更にいはんかたなくて落ちかゝりぬとおぼゆるにある限りさかしき人なし▲いよ〳〵なりといろき續きたる廊に落ちかゝりぬ火のほもえあがりてらうは燒けぬ心魂なくてあるかぎりまどふ▲つれ〳〵とふり〳〵らしてしめやかなる宵の雨に▲風冷かに打ふきて更けゆくほどに▲俄かに風吹きいでゝ空もかきくれぬ▲笠もとりあへずさる心もなきに▲よろづ吹きちらして又なき風なり

▲うちよりほのめく追風もいとゞしく匂ひたちて▲雨少し打そゝぐに風はいと冷かに吹き入りて▲雨やゝふり來れば空はいと暗し▲からうじて今日は日のけしきもなほれり▲月は有明にて光まされるものからかげさやかに見ゆて中々をかしきあけぼのなり何心なき空のけしきも唯見る人からゆゑんにもすごくも見ゆるなりけり▲やう〳〵あけ行く空の景色ことさらにつくりいでたらんやうなり▲天つ空にも例にたがへる月日星の光見ゆ▲夕やみすぎておぼつかなき空のけしき▲明河天に在りて四方に人影無し▲月白く風清し此良夜を奈何せん▲大空に輾り出でたる月一輪▲皎々として空に當る白玉盤▲月色洸々露は玉を點ず▲見る人も無き廿日あまりの月寒けく澄める空▲眉より纖き月▲入かた近く傾きたる月の池にうつろひて▲まばゆきまで照る月の光▲壁もる月の燈に▲月明に星稀に▲影も流るゝ波上の月▲木の葉稀なる梢に高くさしのぼる月の顔▲鋭鎌に似たる月▲岩鼻や此處にも一人月の客▲鷄聲茅店の月、人迹板橋の霜▲深く遠きみ空より人の世近く照らす星▲きらめき出でし星の影▲星はさながら瞬く如き光あり▲光芒森々たる万座の星▲素を引いて銀河に臨み清を凝らして緑烟を洗ふ▲窓を開けば月は我友の如く室に入り來る▲望月の隈なく照すを千里の外まで眺めやる▲曉近くなりて待ち出でたるがいと心深う青みたる樣にて深き山の杉の梢に見えたるあはれなり▲木の間の影うちしぐれたるむら雲がくれの月またあ

はれなり▲椎柴しら樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ身にしみて月の光は人の心やあらんと覺ゆるまでに生きたる心地あれ▲蔽ひかゝりし叢雲の絶間〳〵に明くなりまた闇くなり朦朧と膏油盡きたる燈火の消えんとするに彷彿たり▲照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき▲流るゝ月の淀む間もなし▲星の林に月の舟▲天の河に月の舟を漕ぎかけゆく▲雲と水どちらにありや今日の月▲月涼し心止むれば川の音▲盃を擧げて明月を邀ふ、影に對して三人と成る月は飲むことを解せざれど影は我身に隨ふなり暫く月を伴うて影を將ゐて我歩む我歌へば月は徘徊し、我舞へば影は撩亂す月に情あり影に致あり、月と影とに我此夜の良友を得

▲端山のかひより月さし登れば、岩に碎くる水は白玉をこき散らすかと疑はる、此長へに清らかにして物に滯る事なきを我心とせん▲畑は寒水を籠めて月は沙を籠む▲黄昏の程よりかきくれて降る雨の更くるまゝに名殘なく空すみ渡りて月影皓白ければ▲長閑に晴れ渡りし空も忽ち降り出す村雨に▲昏茫たる海には眞珠を藏め、杳冥たる天には星を宿し、深き人の胸には戀愛を秘め置く、星は天の愛の表象なり▲星は天の詩なり、幸榮、名譽權威をやがて星と名くべきはどに愛と尊嚴とを人に來らしむ、星は美にして神秘なり▲星の天に於けるは美人の眸子の如し▲清夜仰いで森々たる衆星を望む時は、尊嚴、崇高、純潔、敬虔等の觀念吾ながら杳然たる靈光ひらめきて胸

臆に透るを覺ゆ▲星の光は憂ふる心に慰藉を與ふ弱める心に勇氣を供す▲星の光は神の稜威ある笑顔なり▲星は詩人の伴侶として缺くべからざる美の棲家なり▲天の海に雲の波わき立ちて▲小兒は弦月を觀て蒲鉾を思ひ、小女は弦月を見て櫛を思ふ、月は一にて觀る心種々なり▲山また山の峰の雲▲夏の雲の奇なる形のおもしろさよ、譬へば白き衣白き髪白き貌、老人の面影あり、徐々と靈を渡りて、嶺を離れんとする程に、衣の袖はばつとちぎれ、袖の陰よりぬつとばかり大入道、鈍栗眼のありさうな形なり、入道雲は老人雲に挨拶する如く後につきたるその側より、被衣にかくす顏おもはゆげなる女龍とも見るべき雲の、忍びやかに出で來れば、入道と老人は驚き崩れて、平伏すと見る間に散りしその跡には頭かゝへし猛々雲、きよろ〳〵眼に口開いて大洋を惶々瞰視す如くなり▲夏雲のむくり〳〵と一齊に起ちたる樣、嘯く虎吼ゆる獅子躍れる兎蟠れる龍、牙嚙める豺狼など幾群の怪獸の如し▲白雲の袖をかざして▲雲の脚の忙はしくて天の樣たゝならず▲洞穴より捲き起す黑雲の大風に躍り狂ひ▲綿の如き雲は墨を含み▲山雨來らんとして風樓に滿つ▲怒れる雲は五百重に千重に天地を包み▲天俄にかきくもり雨降りそゝぎて盆を覆すが如し▲日の影海に殘りて波を彩り、梢の露、吹き拂ふ風に散るは玉▲雨いと靜に降りて晝ながら天地は眠たげなる樣あり▲雨脚は麻の如し▲雨、水に落ちて紋を成し、風に觸れて線を牽き、烟を

碎き雲を亂す▲天外の黑風は海を吹いて起り、飛雨は江を渡りて來る▲風に隨うて潛に夜に入り物を潤して細に聲無し、雨の趣は此に在り▲碎聲は竹を籠め、冷翠は芭蕉に落つ▲柳に添ひて細光あり、花に濺いで幽點匂ふ▲風雨天を洗ふ▲萬珠亂點▲半天墨を刷りて驟雨來る▲そも〳〵天のうるはひに、雨露霜雪の四つを視し、同じく雪月花の三つの德を配ちたれど雪こそ殊に優れたれ▲空は墨をすりたらむやうなる中に、濃き薄き雲見ゐて、龍なきいふ神もかけるらむと覺ゆ▲月清みわがすむ宿は出でしかど、思へばさしてゆく方も無し

山水

▲濤聲洶々と鑼を擊つが如く皷を鳴すが如く大軍の吶喊して戰に赴くが如し▲海濤の奔騰起伏すると驚の如く鯉の如く雪山の狀の如し▲山は遠くして水は平かに征帆悠々たり▲怪巖突起して帆影遠く碧山に映じて去る▲浮圖は山に據り城を俯す▲煙嵐中斷して奇峰呈露し峰尖に一小塔を著く▲碧峯岸嶠と万松の上に躍出す▲峯巒相接し溪水盤桓す▲此間境僻にして勢阻たり幽潛隱逸の士の樂む所なり▲四山環翠して万木天に參し陰寒晦冥にして奇鬼毒龍の窟に入るが如

し▲石壁束立して、巨瀑これに懸かる銀河の天より落つるが如し▲天地淑靈の氣、結ばれて山嶽となる▲巒谷の詭奇、雲嵐の變幻以て泉石煙霞の膏肓を洗ふに足る▲仰いで壁面を覩れば石ありて突出し瀑は下垂せり石に至りて輒ち怒り駭珠驚玉餘沫霏散して空に漲りて下ると驟雨の至れるが如く衣巾盡く濕ふ快を呼ぶもの之を久しうす▲溪轉ずれば瀑布の絶壁に掛るを望見す長さ……はかり潰沫空に飛び跳擲して下る潭底に至りては復び逆上し輒ち轟然と雷動す▲處々に水簾ありて懸れり綏々灑々として潭石の上に墜つ▲石皆奇狀にして両岸に羅列し或は特立して柱のごとく或は拆裂して門のごとく或は渴驥の澗に飲むがごとく或は臥牛の道に横はれるがごとし五色陸離として相間はり皎は率ね大小斧劈を作し間荷蘂披麻を作すもあり波浪を濯うて以て出づ▲暗礁ありて舟を嚙み砉然と裂けなんとす▲崖に緣りて深きに降れば俄然層崖の傑竪たるを見る上弇ひ下開き瀑は弇中より吐かる穹隆と勢を作して起つ巨靈の巔に伏して口に萬斛の雪を噀くが如し雷撲の響山を撼かし澗に震ふ崖腹に縴路あり劣やく人趾を容る石を攫みて以て瀑背を看るべし▲両岸皆石なり鬼魅の剜擘する所悉く詭態異狀を作す獷獸、獰狒、蹲蟆坐鼇のごときもの累々然と起ち水、之を衝き噴薄洶騰す跳れるは珠の如く懸れるは瓔珞の如く環洄せるは轉轂の如く激電の如く羊角の如し▲川竭くれば山必ず崩る▲草木暢茂し禽獸繁殖す▲原泉混々として晝夜を舍てず

科に盈ちて後進む▲夫れ大壑の物たる注いで滿たず酌んで竭きず▲遂に高山に登り危石を履み百仞の淵に臨む▲碧峰巉然として孤起し上雲霄を干す▲澗上の峰は屏障の如し▲連峰丹碧峭拔攢蹙す▲山は繚繞して伏蛇の如し▲沿江の南皆大山起伏して濤頭に似たり▲高厓絶壁嶄巖突兀たり▲石崖峭立して苔蝕し蘚暈す▲群峯は波濤の間に出で〻百を以て數ふ▲衆山回環して蹲するが如く伏するが如し▲峯巒宛轉して竹木蕭疏たり▲山靡迤として長し▲千巖秀を競ひ萬壑流を爭ふ▲重巖疊嶂天を隱し日を蔽ふ▲環らすに群山を以てし延くに林麓を以てす▲巋然として直ちに群山の表に出づ▲山高うして風多く木長ずること能はず枝悉く下り垂る▲峯攢り岫複なる▲一峯屹然たり▲兩山牆立▲山皆美、石上に青叢を生じ冬夏常に蔚然たり▲最東の一峯尤も奇絶その頂兩岐に分れ双玉蓼の半霄れに挿まれるが如し▲山三面雲冉々として岫を出づ▲石皆巍然として峻流に臨めり▲泉は空巖の中に流れて皆自然の宮商なり▲流は文を織るが如く響は琴を操るが如し▲灘石森然たり▲長林巨石風飄へり水激る〻▲石皆横裂して累層甓の如し▲水泉漱々として驚蛇の草間に出沒するが如し▲斷厓崢嶸として迅流その下を過ぐ▲兩岸皆奇石怪巖下り飲む牛羊の如く群り浴する狻猊の如し▲石色綠潤泉冷々として聲あり▲溪水澗尋にして荒田の中を漫流す▲大石側立すること千仞猛獸奇鬼森然として人を搏たんと欲す▲巖罅泉水下り滴ること唧々として秋雨の

屋檐の間に鳴るが如し▲水に紋暈あり散亂開合す▲清流激湍左右に映帶す▲水石間に行くその聲雷霆の如く千乘の車の如く行くもの震掉して自ら持すること能はず▲崖谷の委會すれば泓然として池となり灣然として溪となる▲水平かなること白練の如く横さまに巨石に觸れ大車輪の流轉をなす▲出づるものは突然として邱となり陷るものは呀然として谷となり窪むものは池となり缺くるものは洞となる▲峻壁に注ぐこと水晶簾の九霄の中より垂れたるが若し▲山を遶つて溪あり清深にして魚多かり▲山は南岸に在つて水に臨み曲折屏の如し▲石屏峭立して瀑は樹間より瀉ぎ下る　亂石林立して泉上より墮ち下は石と鬬ふ▲飛瀑二十丈ばかり崖竅の中に怒擊し萬斛の雪を運して天より擲下するが若し▲壁頂に一瀑を挂けたり銀繩條落半ば潭に落つる時綏々灑々として一束の碎雨に似たり▲水烟浮動▲鵬程際なし▲銀濤空を拍つ▲舟を挽く尤も難し▲灘瀧險惡にして舟檝至危の地と稱せり▲帆檣の聚まること森として竹を立つるが如し▲煙水清遠▲江面練の如く空水呑吐す▲沙白く松青し▲山舒び水緩うして土田あり▲水落ち石出でたり▲一帶瑩然として城を抱いて流れたり▲石塹深さ數十丈窈然として碧を沈む▲溪南は皆漁家なり▲高山森々として一鳥聲きこゆ、木の下闇茂りあひて、夜行くが如し、雲端につちふる。心地して篠の中蹈み分けく　水をわたり、岩を蹶て▲岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り土石老いて、苔滑に岩上の

院、院扉を閉ぢて物の音きこえず▲水きはまり雲おこる、王維か何、山の色、溪の聲、蘇軾の心もさとらざらめや▲一鳥聲ありて山更に幽なり▲日の入りて、空も、涙も、紅に染めたるが、白く三日月のみ見ゆるに、黒く富士の高嶺の聳えたるにぞ、憂かりしとも忘れにける、歌よみしもまた忘れぬ▲なつかしき山を、足疾きむら雲の中に見出したるは、久しく逢はざりける故郷人にからうじて逢ひし、心地ぞする▲月出で、浪の上は玉をしきたらんやうなるに▲疎林路黒く平湖波白し▲水は淺く流れて清く、山は低く連つて綠なり▲渺々たる海水瑠璃をしけりともいひつべし▲入江々々の蘆の葉に、そよ〳〵と吹き來る風は、夏のしるべか涼しさよ▲遠に白きは岩越す涙か、さらせる布か▲綠樹影沈んで魚木に登る景色あり、月海上に浮んでは、兎も波を走るが、おもしろの島の景▲釣の暇も波の上、かすみわたりて沖ゆくや、海士の小舟のはの〳〵と見えて殘る夕暮、浦風までものどかなる▲頭を回らせば山嶂遠くして重疊、耳を欹つれば猿猴啼いて寂寞▲烟翠色を埋めて千里に連り日晴嵐を射て一方に聳ゆ▲危嶺箕を學んで風木葉を簸り懸瀑布をいれて水聲礎を打つ▲旦に牧笛雲を穿つて過ぐれば夕に樵歌月を帶びて往く雲仰げば青壁の千仞なる白雲横はりて野婆の帽子かと疑はれ、見下せば深谷幽靜にて葛藤の長へなる久米路の棧かと怪まる▲前には廣原渺々として小丘處々に起伏し、後には峯巒迤邐として崩濤の如し▲麓には

茂林翠を凝し樹間に人家の軒散點す▲富士山は、吾々の先祖には、斯の山が神の力と思ふ計りならず神それ自身が斯の山なりと視しやも知れず▲關東の平原に於て田は半ば刈り入れられ、田の畔にある榛の樹も瘦せて骨のみとなり、案山子はゝや其笠の上に寂しげに鴉を留め、百舌も姿をかくしたる頃、唯彼方に高く富士の山を見るばかり、寂寞なる程に山の神韻は縹渺として畫家の所謂遠景の致を描き出し來る▲秋の澄み亘りたる空に、相摸灘に出で見れば、彼方に江の島、此方に伊豆の一端、長汀曲浦參差として畫の如く、それのみにて佳景なるに、しかも富士は其上に突兀として聳ゑ雪の晃を倒に、鏡の如き相摸灘の洋心に高潔の容を印せるを見れば其景に限なき位を添ふ▲波濶は晴に笑ひ雨に愁へて蕭々として汀を洗ひ白沙の上に奇大を描き聲を收めて回る▲水は烟を生じ山は雲を吐く▲徐に湖面を望めば、鷺鷗の翩々たる、蒼旻墨なきに何の文字ぞ、扁舟の搖々たる、金波絲無きに何の錦繡ぞ▲日出で烟消えて人を見ず、欸乃一聲山水綠あり▲好山は裝うて招くが如く清流は笑みて語るに似たり▲山勢奔騰逸せる馬の如く水流委曲驚ける蛇に似たり▲嵐光翠影▲山峽盡くる處平郊開きて又山あり、瘦せたる澗水は細く路を縫ひ、黃ばみたる林樾は、長く崖に添ふ、▲模糊たる烟嵐は彼の山髻に搖曳し、縹渺たる紫翠を染めなす時は宛も夢より醒めし美人が嬌羞を帶びて語らんとするが如し▲天風高く衆鳥を吹き去りて、孤雲

閑に去來する處、風標濯然天姿颯爽たる雄將の徐に大荒を睥睨たるが如し▲若し旋風、曠漠の大野に起り黄茅白麻齊しく靡き、吹きて峯頭の雪華を落すときは、雲烟揺蕩し、溺渤たる黑氣、長空に瀰漫し、看々玉より清き孱顔は冥濛の裡に沒し去る▲餘光おぼろに紺碧の天にとゝむる殘陽の影に、冷然立ちたる鐵芙蓉の姿▲山はかくして朝の雲夕の烟に其姿を千變萬化し月に畫かれ霞に彩られ▲雨少しちそゝぎ山風冷かに吹きたるに瀧のよどみもまさりて音高く聞ゆ▲道の程はるけくけはしき山水のあり樣▲山のたゝずまひ水のすがた▲山のおきて水の趣き▲水清げに溪のあはひよりながれ來て▲誰がゆめをや流し來つらん▲翠したゝる山のかはばせにならぬこゝちせらるゝ▲辿りくゝて▲行きくゝて靜けさかひには到りぬ▲鳥さへ聲せぬ深山▲春知らぬ松の戸に深山をわがものがほに住める人の心憎さ▲浮世の塵もいたらぬ奥山▲あじろのけはひ近く耳かしかましき川のわたりにて靜かなるおもひにかなはぬ方もあれば▲うちもまどろまず川風のいとあらましきに木の葉のちりかふ音水のひゝきなど哀れもすぎて物おそろしく心細きところなり▲霧わたるなかより柴つむ船をこぎいでゝかすかに行きかふ▲水のおとなひなつかしからず▲宇治ばしのいとものふりて見わたるなど霧晴れゆけばいとゝあらましき岸のわたりを打見やりて▲山のかたは霞へだてゝ寒き洲崎に立てる鵜の姿も處がらいとをかしう見ゆ▲目なれぬことゝ

もとりあつめたる處なり▲小き舟にのりてさし渡りたまふほど遙かならん岸にしも漕ぎはなれたらんやうに心ぼそく▲昔よりこの川のはやくおそろしきことをいひて先つごろ渡し守がうまごの童の棹さしはづして落ちいりにけるすべていたづらになる人大かたにありと人々もいひあへり▲枕をそばだてゝ四方のあらしを聞きたまふに浪たゝこゝもとに立ちくる心ちして▲煙のいと近く時々立ち來るはこれや蜑の鹽燒くならん▲海士どもあさりして貝つものもてまゐる▲海のおもてはうら〳〵となぎわたりて夕も知らぬこしかた行くさき▲月さしいで汐の近くみち來ける跡もあらはになごりなは寄せかへる浪荒きを柴の戸おしあけてながめやるに▲この風今暫し止まざらましかば汐のぼりてのこる處なからまし神の助けおろかならざりけり　涙の聲秋の風には猶ひゝきさ異なり鹽やく烟かすかにたなびきてとりあつめたる處のさまなり▲風にはかに吹きいでゝ浪あらく小舟はこの葉散すがごとく飄るを見ては心も心ならず▲舟人もかぢ緒たゆて如何ともせんすべなく只神をぞねんじける▲今日は空晴れわたりて海づら殊におだやかにあをみわたり舟の行くさま畫にかけるやうなり▲島々さへ霞のひまより見ゆ來て手にとるばかりに覺ゆ

居處

城郭闤闠粉壁碧瓦は煙樹の中に出没す▲人家は皆両岸竹樹の中に在り長橋其間に蜿蜒たり橋の中央に嶼あり▲人家佛寺半隠れ半見はれ危檣輻湊して並に煙靄の中に在り▲青龍沈み彩虹跨り橋忽然と成る▲……城は翠微の上に露れ粉壁鮮明なり▲樓閣重層碧瓦鱗の如く堊壁雪の如し▲樓臺華潔一に洋風に摸倣す▲樓閣堂殿奇巧巨麗▲殿閣宏壮麗にして靡ならず▲殿舍宏大廊廡修直▲左に飛閣を浮べ右に間館を列す▲飛閣雲を干し浮階虚に乗ず▲飛甍曲檻丹碧縹緲▲周すに回廊の壮なるを以てす▲門庭の氣象極めて閎壮▲宅成りぬ甚だ精麗なり▲新宅を營む甚だ麗はし▲築いてこれを大にし擴てこれを拓く▲土木の功赭堊の色遺巧なし▲勾欄輕簾▲綺窓繡簾▲棟宇閎麗前大池に臨む▲閣あり岡阜に因るその高さ十丈▲重門周垣以て水に臨む▲堂は飾を待たずして已に奐たり▲大厦成つて燕雀相賀す▲丹刻暈飛輪奐鳳立▲その宅を制するや却は長堤を阻て前は清渠に臨む▲流水舍下を周り觀閣池臺あり▲自らその意を以て規度し山の陽において新室をつくる▲又屋後において小園を搆へ亭をその中に作る▲その居の後において堂をつくること若干楹▲皆水に臨み樓を築いて以て景致を占む▲前小池に臨み亭榭花石あり▲芳林軒庭に列なり清流

堂宇に激す▲高山前に在り流水下に在り以て俯仰すべく以て宴樂すべし▲流水戸を遶り飛泉檐に挂る▲園の廣さ百畝にして流水その前に横たはり清池その右に漫たり▲涼臺清池游息の亭徴歩の徑皆その前に在り▲流を引き樹を種ゑて以て休息の所とす▲亭をその處に爲るその山川の勝城邑の盛宮室の榮簟席を下らずして四矚に盡く▲此堂の勝は清風朗月及び海山烟雲の晦明變化皆樂むべきにあらざるは莫し▲南窓は月に宜しく北牖は風に宜しく東西兼ねて海山眺望の勝あり▲階を拾うて樓に上るに廣さ弓に過ぎず▲門を開けば山を見る廛市を去ること僅かに百歩にして超然として物外の趣あり▲一畝の宮上には青山を矚み下には流水を聽き奇花修竹左右に布列せり▲庭に老槐四行あり南牆は鉅竹千挺儼立して相持するが如し▲門に剝啄なく松影叅差たり▲書室斗大の如く閒寂として人に可なり▲空室蓬戸褐衣疎食▲自ら小庵を作る▲宅舍弊薄資財餘りなし▲齋中ある所なし惟茶鐺酒臼經案繩床のみ▲白雲を以て藩籬とし碧山を以て屏風とす▲紙窓竹室燈火青熒輙ち此間において少佳趣を得たり▲明窓の下に圖史琴尊を羅列して自ら娛む▲一堂に坐して圖書を左右にす書一牀畫一幅花數本を藝う室屋堅樸にして粉漆の飾なし▲風帆煙鳥几席の間に往來す▲之を經し之を營み茨して之を蓋ひ塗りて之を壁す▲寺は山を負ひ野に臨み河流邐迤して龍蛇の奔るが如くに草莽の間に隱見す▲其牖を啓けば眼界遼濶にして遠山近峯劍を攢め圭を植

て交々來りて奇を几案の間に鬻ぐ▲琴酒は堂に在り菊柳は庭に滿つ▲堂廡輪奐更に前日に加ふるものあり▲方外の室三楹あり中に閩蘭澳竹を植ゑ上に鄭思省の畫ける無根梅の一軸を懸く▲もとの木立山のたゝずまひおもしろき處なるを池の心ひろくしなしてめでたくつくりのゝしる▲いとゞ玉のうてなに磨きしつらひよろづをとゝのへ▲おとゝの作りざましつらひざまさらにもいはず庭のすなごも玉をかさねたらんやうに見ゑてかゝやく心ちす▲もとありける池山をもびんなき處なるをばくづしかへて水の趣山のおきてをあらためてさまぐに心ばへを造らす▲近き廊の戸おしあくるよりみすの中の追風なまめかしく吹きにほはして物よりことに氣高く覺ゆ▲みすかけかへ此處彼處かきはらひいはがくれにつもれる紅葉のくち葉すこしはるけやり水のみくさ掃はず▲道はしげりつれぞこの有樣はいとはれ〳〵し川の景色も山のいろも持てはやしたるつくりざまを見出して日頃のいぶせき慰みぬる心ちす▲此家のかたはらにひがさといふもの新しうして上ははにとみ四五間ばかりあげわたして簾なぞもいと白う涼しげなるにをかしき額つきのすき陰あまた見ゑて窺く▲門は蔀のやうなるをおしあげたる見いれのはぞなく物はかなきすまひ▲同じ小柴なれど麗はしうしわたして清げなるやらうなんどつゝけて木立いとよしあるは何人の住むにかと問ふ▲おなじ柴のいほりなれど少涼しき水の流も見ゆめり▲垣のさまより始めてめづらかに見

ゆ▲住めるさまいはんかたなく唐めきたり▲處のさま繪に書きたらんやうなるに竹あめる垣しわたして石の橋松の柱おそろかなる物からめづらかにをかし▲山水のつらにいかめしき堂を建て▲つくりなしたる心ばへ木立立石前栽などの有樣ゐもいはぬ入江の水など繪にかゝば心のいたり少からん繪師はかき及ぶまじと見ゆ▲月あかくさし出でたるに見れば格子二まばかりあげてすだれ動くけしきなり▲面白き寺なりこれは河づらにゐもいはぬ松陰に何のいたはりもなく立てたるしんてんのことそぎたるさまも自から山里の哀れを見せたり▲家のさまも面白うて年頃へつる海面におぼゐたれば處かへたる心ちもせず▲まだいとあら〳〵しきにあじろ屏風など見もしらぬしつらひなり▲枝折戸はのかにあけさして人まちがはなるぞゆかしき▲行く川の流はたゐずしてしかも元の水にあらずと鴨の長明が筆のすさみ硯の海の深きに殘るすみだ川の流清らかにして武藏と下總との境なればとて兩國橋の名も高くいざこと問はんと詠じたる都鳥に引きかへすれ違ふ舟の行方は秋の木の葉の散浮ぶがごとく長橋の涙に伏すは龍の畫寢をするに似たり、かたへには輕業の大鼓雲に響けば、雷も臍をかゝへて逃げ去り索麪の高盛は降りつゝの手爾葉を移して小人島の不二山か思はゆ、長命丸の看板に親子連は袖を捻ひ・編笠提た男には田舍武士懷をおさへてかたより、利口のほうかしは豆と德利を覆し、西瓜の立賣は行燈の朱を奪ふ事を憎む、虫の聲々

は一荷の秋を荷ひ、ひやつこい〳〵は清水流れぬ柳陰に立寄り、稽古淨瑠璃の乙はさんげ〳〵に打消され、五十嵐のふん〳〵たるは蒲燒の匂ひにおさる、浮繪を見るものは壺中の仙を思ひ硝子細工にたかる群集ば、夏の氷柱と疑ふ、鉢植の木は水に蘇り、はりぬきの龜は風を以て魂とす、沫雪の盤からく、幾世餅の甘たるく、かんばやしが赤前だれは、つめられた跡斑に、若盛が二階座敷は好次第の馳走ぶり、燈籠賣は世帶の闇を照し、こはだの鮓は諸人の醉を催す、髪結床には紋を彩り、茶店には藥鑵をかゞやかす、講釋師の黃色なる聲、玉子々々の白聲、あめ賣が口の旨き榧の痰切が横なまり、燈籠草店は珊瑚樹をならべ、玉蜀黍は鮫をかざる、無緣寺の鐘は黃昏の耳に響き、両國橋の繁昌畫から夜をこめて▲寒月霜に冴ゆる深川木場の河岸通は、淡路島通ふ千鳥戀の辻占と、節面白く觸れ歩く、辻占賣の聲遠退くにつれて、夜は漸くに更け渡り、肌寒き夜風のざわ〳〵と一層吹き荒むに▲先づ月見の座敷には、一脚の机据ゑ置き、神酒まん中に供へ、二個の三寶には、栗、芋、枝豆、柿、葡萄などおもひ〳〵の菓物をかざり、根竹の花瓶には、尾花、水引、月見草などいろ〳〵の、草花挿して、今やと待つに、向うの端山一つゞつ明るくなり、きら〳〵と峯の上に光滿ちて

人生

往事を追懷すれば恍として世を隔つるが如し▲珍商隔絶して終天相見ず▲交る所は騷人墨客羽流道士と擊劍馳馬書工畫博の徒と其間に擇ぶ所なし▲琴書を捨てゝ簿算を事とし日夕淬勵して倦まず▲家居無聊貧窶骨に逼る人の爲に傭書して以て活をなし▲沈痾伏枕數日にして瘳ひず▲德行功業の赫々たるものあり▲片善隻失も必ず賛し必ず規し相勗むるに道義を以てす▲事は常に巧に損ひて拙に成る▲道同じからずば相爲に謀らず▲性本澹泊にして紛華を苦厭す▲性文武を兼ね雄姿偉略あり▲その德と業と益す崇うして以て廣く人意料の外に超ゆるあり▲温粹の色謙和の貌薫然として人に心醉せしむ▲いはゆる鐵心石腸にして富貴の念において灰滅し盡きたり▲既に重望を負うて才氣又實に能く群英を籠罩す▲終日温々として物と競ふことなし▲居身儉約して家に餘貲なし▲その家を治むること具さに條理ありて細務に察々たらず▲夙くより家學を立て一世を震盪す▲妙法に出で法、學に得▲學は明倫の具、文は興道の器、一にして二に非ざるなり▲治教休明にして大化滂流す▲制を改め規を立て學政を更張す▲群生青衿黌に入りて業を收め諷誦の聲琅々として起る▲少うして學ぶは古人之を日出の光に譬ふ▲年富み氣鋭く日に進み、月に長ず▲師は天地君親に配す則ち其位に居るもの其責任甚だ重からずや▲

天下英傑秀異の士之を生むものは造物、之を成すものは、君師にして而して生成の責を兼ぬるものは尤も父兄に在り▲府縣に論なく都鄙を分たず遐陬僻壤十室の邑、三戸の村を以てすと雖も皆學校の設あり て以て子弟を教導し竟に邑に不學の民なくに里に沒字の子なきに至り駸々と日に文明の域に進めり▲教化の洽くして生徒の夥しきを諸縣の右に在り▲能く簡靖を以て治をなし事々便を民に求む▲賢と能とを選めば政こゝを以て和す▲寛以て猛を濟ひ猛以て寛を濟ふ▲弊を除き利を興す參古への民を化し俗を成すものは必ず教化を以て急務となす▲事巨細となく皆悉曲周詳夜以て日に繼ぎ以て勞となさず▲その風俗を究めその枉直を考ふその下これを能く欺くことなし▲凡そ奏獄の疑はしきものは必ず寛典を持す全活甚だ衆し▲粟を出し人を活す尤も多し▲黯然として魂を銷するは離別なり▲發軫の期定まりぬ▲車を約し裝を治む▲某の日を擇んで行を啓く▲その行に于いてやその行いて留まらざるを恨む▲行期を緩うする能はず▲この別るゝに於てや酒を擧げて相屬す▲聊かその行色を壯んにす▲此行に在つてはこれを勉めんのみ▲道理遼遠山川阻深▲馬に秣ひ舟を艤ふ▲駱馬山を跋り彩鷁海に帆す▲手を解き面に背く▲その行くにおいて余と某と縞かに酒肴を載せて都門外に席し賓客を盛んにして以てこれを餞す▲門を出でゝ惘々として離別憐むべき色あり▲杖履に相從ふこと能はず▲離夢の躑躅たるを知つて別魂の飛揚するを

意ふ▲徘徊して皆袂を分つに忍びず復荊を班いて巖下に小飲す▲一別遂に參商の如し▲手を分つに造つて涕を銜み咸寂寞として神を傷む▲數行の字勉めて離歌に代ふ▲其人四目両口あるにあらず而して能く此の如し想望の餘一たび之を見んとす▲若き人必ずしも千載の上、万里の外に求めざるなり▲吾が生の晩きを歎じて之が爲に慨然たり▲宗室の親を以て補佐の重に任ず▲黒頭にして職を辭じ急流に勇退して赤松子と物表に從ふ▲古人を黄卷の中に求めんか▲車塵馬蹄を拜す▲其手筆を獲て以て自ら慰めんとす▲人と爲り豪邁磊落にして一世の人を股掌の上に玩弄す▲万鍾の富も百城の居も之を視ると一錢に直せず▲學を好みて幹蠱の才あり▲澹泊寧靜を以て心とな

し敢て奔競爭進せず▲義を重んずること山嶽の如く死を甘んずること飴蜜の如し▲頽風を振ひ衰俗を激す▲變に臨むに及びては理勢を審にし輕重を較し敬愼諦謀以て能く偉節を天下に立て烈躅を後世に耀かす▲人の感激追思すること一日の如く其墓に香火するもの踵隱ひ袂接す▲正氣は天地に塞つべく勇義は四海に震ふべし▲内を衛り外を捍ぐ綽然として餘裕あり▲浩落磊率▲嚴毅峻整▲壎篪翕和して弟兄の如し然り▲其人樸誠謙和にして辭氣悃愊恂々如たり▲正色危言▲古人を尚友し硯圃筆農泊如として自ら樂み名利紛華の何物たるかを知らず▲沈毅清介にして氣節を堅持し嘐々と古人を追跡す▲英氣焯爍▲頭角嶄然▲沈厚藹如才華彬鬱▲人となり短小精悍にして皙白女

子の如し▲博く武藝を綜べ學を好みて兵法に通じ常に英傑を以て自ら處る▲劒を叩きて顧叱す目光烱々聲は鐘の如し▲赤貧洗ふが如く塵甑罄室之に處て晏如たり▲世事紛華に於て脫然遺棄し未だ嘗て諸を胸中に存せず▲齒德俱に卲く海內の遺老たり▲忠孝大節の關する所に至りては盛氣昌言滿堂壓服す▲破衲懸鶉の如くにして補はず髡頭猬毛の如くにして剃らず▲酒後耳熟して談は劇に論は快に歡頰張りて咳唾飛ぶ▲楚の材は晉の用なり▲倚馬の才摩盾の技其人なかるべからず▲著書の夥しきと坐すれば頭を埋め立てば身に等し▲其人衲衣弊垢面は赤玉の如し談論風生し大に時事を慨く▲資性耿介にして苟くも人に交はるを欲せず▲方外の翹楚▲社中の領袖▲高歡長髯にして角巾野服し几に倚りて竹如意を手にす▲狀貌都雅にして衣裳端正なり一睹して其貴公子たるを知る▲春花の纖縟なるは卒ね風雨に壞られ秋月の皎潔なるは雪煙輙ち之を掩ふ▲別後三紀にして其顏澤々と鑑すべし予は則ち乾雪禿鬢に上る相視て愕然たり▲欣薰の色と樸誠の容と宛然目に在り老淚の臆を沾すを覺ゆ▲今昔を追想して淚爲に之に隕つ▲同時樽酒して文を論せしとを回視すれば恍として昨日の如し嗟乎光陰の移轉すること曾て瞬を容れず而して予は塵事に淪汨して空しく夏と秋とを度れり▲若し今にして勉めず優遊して以て歲を卒へ身已に老ゆるに至りて徒に以て悲悔するも何ぞ及ばん▲先師歿して既に……餘年其人、骨と皆已に枯れたり獨り其文章

耿々として在り其耿々たるものは何ぞ先師の精神なり▲逝水の年華駒隙も啻ならず昨日の新奇も今日の陳腐たり▲闔府蕩然として城郭邸宅化して一焦土と成る▲檐を焼き戸を爛す▲烈火煙焔▲憐巷未だ燼せずして本街煙を出す▲奔走馳突して額を爛ちし頭を焦がす▲火に遺火あり放火あり遺火は無心に出で放火は有意に之を爲す▲淋潦旬に渉り横流汎濫す▲甚雨數日迅復衝突す▲隄外の水、屋よりも高く水閘を拔壞し行旅通せず旁近の諸村蕩然と寸青なし▲陽焔方に旺にして地維れ大に震ふ波瀾洶騰天門を蹴り坤軸を撼かし丘陵を汨し城郭を襄す▲鄙夫は秦楚を以て大となせども達者之を視れば一蠻のみ一觸のみ▲其大名を成し、事偶然に非ず▲凡そ事隱さんと欲せば則ち必ず之を疑ふ愈隱さば則ち愈疑ふ是れ人の常情なり▲天下を得るものは天下を得るに非ずして天下の人心を得るなり天下を失ふものは亦天下を失ふに非ずして天下の人心を失ふなり▲利口の害言ふに勝ふべけんや聖人嘗て其邦家を覆すを惡む▲謂はゆる利口とは是を以て非となし非を以て是となし顚倒譎詭横さまに口辨を騁せ以て世主を欺惑する是れなり▲凡そ士たらんものは苟くも知るあらば進言するを欲せざるはなし而して常に機會を得ざるを患ふ▲大旨灼然として見るべし▲人神は道を異にす故に古は人の死を以て其祭祀の禮を廢せず既に殯葬すれば輙ち之を行ふ　是れ國子の大事なり吾子は草莽の臣を以て之を論ず安と謂ふべし曰く唯其れ大事なり故

に之を論せり夫れ知らずして論ずる之を妄と謂ひ知りて論せざる之を不忠と謂ふ不忠と妄とは余爲さゞるなり▲世に道を同じうして志を異にするものあり道を異にして志を同じうするものあり道同じうして志の異なる其道未だ嘗て異ならずばあらず道異にして志の同じき其道未だ嘗て同じからず同あらず故に交を人に取る必ずしも道の異同を問はず當に先づ志の同不同を問ふべきのみ▲悔ゆることは難きにあらじ悔いて罪を人に謝せんは更に難し▲それ木には望あり、假令斫らるゝとも復芽を出して其枝絶えず、たとひ其根地の中に老い、幹土に枯るゝとも、水の浸潤にあへば、即ち芽をふき枝を出して若樹に異ならず、然ど人は死すれば消えうす、人の呼吸絶えば

安に在らんや、水は海に渇き河は涸れてかわく、是の如く人も死してまた起きず、天の盡るまで目覺めざるなり▲二人は一人に愈る其はその勞苦の爲に善報を得ればなり、即ちその跌倒る時には一箇の人其伴侶を扶けおこすべし、されど單身にして倒るゝ者は憐なるかな、之を扶け起す者無きなり、又二人共に寢れば温煖なり一人ならば爭で温煖ならんや、人は須らく互に相結びて此人生を過ぐべきものなり▲韶光の春の朝には美色開艶の顏を增すと雖も一榮の春の暮には眼花早く凋み命葉忽ちに枝を散らす、實に一生は夢の如く萬事は皆幻に似たり▲浮生は憑み少く、水上の波より輕し、形躰保ち難く、樹頭の花よりも脆し、風に翻る蘭花、淺深の粧、先づ以て不定の

境界▲盛者必衰、會者定離▲天地は萬物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり▲君見ずや黄河の水は天上より來り、奔流海に到りて復た廻らず、又見ずや高堂の明鏡、白髪を悲むを、朝には青絲の如くり▲暮には雪の如し▲天は我材を生ずると必ず用あらん▲人生は希望なり英國の文豪カーライル曰く、余は人として生れたり、人生は戰爭ならざるべからず、余は此戰爭に降伏せざるべし▲苦しき胸の浮雲に、老蘇の杜ぞ雨の漏る、此世は假の傘やどり▲人生根蔕なし、飄として陌上の塵の如し▲熟々鑑るに錢湯ほど捷徑の教諭なるは無し、其故如何となれば賢愚邪正貧富貴賤湯を浴んとて裸形になるは、天地自然の道理、釋迦も孔子も於三も權助も、産れたまゝの容にて、惜い欲いも西の海、さらりと無欲の形なり、此に浴する人々も水舟の升、陸湯の桶、方圓の器に隨ふ道理を悟りて、湯屋の流れ板の如く、己が心常をに磨きて諸々の垢をたけな、人間一生五十年、二度入の御方あるとも御一人前の分別あるは湯屋の張札の如く、一心足らぬ萬能膏あり、兎角煩悩の火の用心は湯屋の定書に似たり、心に驕奢の風立ば家産は何時にても早仕舞なり、五倫五體は天地より預物なれば、大切の品を御持參ものなるを、色と酒とに魂の失物不存、名聞利欲の喧嘩口論喜怒哀樂の高聲御無用、此文言を守らぬ時は、仕舞湯に入損ひ、モウ抜さましたと言はれて後悔手巾を咬むも益無し、唯一生の用心は、軀を借切の戸棚へ納め、魂に錠をおろして

、六情を履違へぬやうに堅く相守可申事▲世は海なり、身は舟なり、志は梶なり、梶をあしくとれば、行くべき方に行かず、風波にあへば、舟覆へるが如く、志のもちやう肝要なりあしく、志を持てば、身をくつがへす、梶のとりやうあしくして、舟をくつがへすが如し▲徳星昭衍厥れ維れ休祥▲壽星仍に出でゝ淵耀光明▲神祇懽喜申ぬるに福應を以てす▲禎祥の見るゝには必ず從つて來るあり▲休徵咸く集り福應具に臻る▲壽考にして後能く諸福を享く▲徳は年と共にして俱に進むこと日昇月恒の如し▲樂んで節あれば和平にして壽考なり▲樂只君子は萬壽疆りなし▲竹の苞さが如く松の茂きが如し▲爾をして昌にして熾んならしむ爾をして壽うして富ましむ

▲これを仁壽の域に躋す▲靈龜の修壽を稟く▲壽考維れ祺く以て景福を介く▲萬有千歳眉壽害げあることなし▲天下誰か愛慕してその壽を欲せざらん▲黄髮兒齒▲童顔渥丹齒髮衰へず▲年齒高しと雖も氣力愈よ厲し▲曼澤怡面血氣盛んなり▲耳目明達神氣以て靈なり▲筋力耳目未だ衰老を覺えず▲視聽心慮未だ昏錯せず▲少壯の時に比すれば精神日にまさる〳〵強健なり▲耳目聰明血氣和平▲身それ康疆顔貌三四十の如し▲行年七十猶嬰兒の色あり▲人生七十振古得難しと稱せり▲亦神を頤ひ年を保つに足る▲葛巾鳩杖悠然として出づ▲華誕の辰▲設悅の辰子前に拜し孫後に拜す▲子孫豐厚令聞忘れず▲嫁して子あるは女子の慶なり▲二姓の好を合す▲三加の祝ひ▲笄

服の慶▲弄璋の擧（男子を生む）▲弄瓦の喜（女子を生む）▲高堂慶を稱し里閭更に賀す▲春酒眉壽の期を介く▲敬んで一觴を獻じて壽をなす▲洗腆酒を用ゐて觥を稱げ壽を上つる▲壽觴擧り綵衣趨る▲鄰里鄕黨烟亞の戚咸壽を獻じ堂に躋らんことを思ふ▲相與に南山の章を歌うて壽をなす▲歡欣踊躍以て歌ひ以て舞ふ▲里人將に詩を賦し壽を介けんとす▲輙ち自ら揆らず不腆の辭を以て賀となす▲諸孫皆秀發以て詩書の澤を知るべし▲節儉謹信以て壽し終に子孫に傳ふ▲咸嘉祉を獲て闕遺あることを靡し▲舊疾の嬰る所年を彌りて未だ愈えず▲如何ぞ斯人にして斯病あり▲疾に遭うて竟に起たず嗚呼悲しいかな▲骨髓の疾實に身に錘まる▲一旦劇疾に嬰り遽然寤えず▲病革きに几に隱つて坐す▲病惱症惡藥石及ばず▲鍼灸達せず誠に死の端▲その形骨を觀るに必ず壽ならず▲遂に目を瞑し奄然として盡るに歸す▲今や不幸にして奄忽永く歸す▲纊を屬して以て絶氣を俟つ▲死する日家に儋石の儲へなし▲化して異物となる▲獨り不幸にして死す豈にその命にあらずや悲しい夫▲英魄靈氣與物に隨うて腐散せず▲一夕の疾を以て溘焉として背かる▲老病漸く篤し幾ばくもなく館舍を捐つ▲亦それ不幸にして中壽に至ることを得ずそれ命なるかな▲凡そ與に詩歌酒讌する所のもの今已に零落殆んど盡く▲向の同游は死裘睽隔して既に見るを得ず▲曾て共に花を賞せし同人前後凋謝▲魂氣之かざることなく骨肉此に歸復す▲如何ぞ靈祇我

が吉士を殲せる▲身殁り名垂るゝは先哲の題する所▲昊天弔まず景命それ卒はる▲蘭玉早く凋む▲玉樹を埋みて土中に著す人情をして何ぞ能く已ましめん▲蘭摧けて蕙嘆くに禁へず▲天乎極り罔し何ぞ奪ふことの棘かなる▲魂兮往け梁木實に摧く▲伉儷の變▲鶺鴒の憂▲母の艱に丁る▲女を喪ふ戚み有り▲遣車引に就き哀挽路に盈つ▲輙ち墓門に踉蹌し松楸の間に號哭す見る者これを哀む▲恍としてその面を覿てその謦欬を聆くが如し▲如何ぞ穹蒼遐年を授けざる▲凡そ我が四方同好の人永懐哀悼念を置く所靡し▲幽明茫然として一慟腸絶ゆ▲棺を撫して訣れをなしそれまた何をか言はん▲平昔を感想し物に觸れて悽々たり▲衆相嗟悼して玉摧け蘭折るの嘆あり▲此を念うて哽咽し涙落つること洗ふが如し▲哀至り涙隨ふ豈に能く忍ばんや▲輙ち泫然として覺えず涙下る▲書してその子に遺し墓に碣せしむ▲今復履歴を碑に勒してこれを不朽にせんと欲す▲薄祭を修めて以て舊好を敦うすべし▲煢々たる游魂誰か主とし誰か祀る死して嵩里に相見ることあるが如し▲予が心の悲み自らその泫然流涕の己むなきを知らざるなり。

遊覽

道巾野服して二人行く〳〵相語る▲人をして翛然と神爽かならむ▲飄然と漫游して拘束を受けず▲名山水の境を跋渉し會心の處ある毎に輙ち琴書を寓す▲雪泥鴻爪▲風餐露宿して百境を經盡す▲佳山水と名士韵人とに遇はゞ輙ち停留して去らず▲林樾を排し巉巖を踰て彷徨縱觀す▲桃源の漁郎が棹を返して後一人の至るものあるなし▲笠を頂き包を腰にし一囊の錢を操りて帝覇の都に歴遊す▲軒眉濶歩し袍褶に風生じ恢々乎と無人の地を行くが如くす▲舁夫を傭ひ一竹輿に駕し田野を行き山砠を經、水厓を度り白沙翠竹の間に逍遙し酒を飲み詩を哦して以て樂とす▲山中の水音を愛し溪曲に上下し瞑目して靜聽すれば忽ちにして金鼓忽ちにして絲竹、宮羽徵角耳を澄まし神を清うす▲賞心樂事▲行樂倦むを忘る▲都府の風塵中に月を看んよりは寧ろ他鄉靜幽の境に於てするを得意とす▲武藏野を狩行くに、まことに行くとも涯のあらばこそ、萩、薄、女郎花の露に、宿れる虫の聲々、哀れを催すばかりなり▲あくれば八月十三日、秋霧、いよ〳〵深くして、道もさだかに見わかず、馬にまかせて行くに、長井の庄にも着きぬ▲昔は此もとも、月の名におふ武藏野なりしよし、今は家連り田畠と變じて、露おく草の名にもあらぬ、

大根牛房の殊にめでたき里なり▲島々の數を盡して、歃つものは天を指し、ふすものは波に匍匐し、あるは二重にかたより三重に疊みて▲左にわかれ右に連る、負ふあり抱けるあり、兒孫を愛すが如し、松の綠濃かに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲自からためたるが如し、其氣色窅然として美人の顏を粧ふ▲高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて、夜行くが如し、雲端につちふる心地して、篠の中蹈み分け〳〵水を涉り岩に躓て、肌に冷たき汗を流して里に出づ▲烏は黑く生れながら、鷺の白からむ願も無し、笠はあるにまかせ、雨を凌ぐものに、菅蓑はあれど、今樣は合羽で仕まふ、錢を入れたるは、草鞋一足にて、天晴旅立の裝出來たり▲天氣よき夜明の雲あひ白みかゝり、並樹の木陰、まだはの暗く、遠近人の笠の內、そろ〳〵見えたり▲水さはまり、雲起る、王維が句、山の色溪の聲、蘇軾の心もさとらざらめや▲地引網を引く狀面白く、引き寄せたるを見るに、小き鰺、烏賊、又目馴れぬ小魚數百を得たり、手づから漁りしたる心地して浦人等に求る程錢とらせて皆あつものとしつ、下部ども船子どもまで、飽きみちて腹鼓を打ちて、海の面ひゝくばかりに、ざわめき喜ぶ▲月は鎌をとぎたてたるやうに、きら〳〵と山のは近く、さし出ければ、夜寒の風も忘れて、たゞしのすだれ手も、たゞきまで、かゝげゆくに、やう〳〵明けゆくにや、寺の鐘もさやかに、關の此方に響けば、をちこち人の聲あとさき

にさわぎて▲堂荒れて昔覺ゆる月のみ高く清らなり▲此わたりには知る人も無れば宿もとらで、袖の露うちはらひつゝ舟に乘れば苦もる雫▲浪のうへ、心よく晴れわたり、名殘の雲、ところ〳〵消ゆがたなり▲巉道を踏み嶮路に登るに、掬樹森列して日を遮り、山篠生茂りて徑を塞ぐ、枯れたる老樹路に横はりたる踰るは臥龍を踏むが如し▲岩にとりつき竹の根を力草とし、一歩に一聲を發しつゝ、氣を張り汗を流し、千辛万苦▲左右は千丈の谷なり、踏む所僅に二三尺▲さて眺望せば國中はさらなり、諸の連山智眼下に波濤す、▲某の川は白き絲をひき、某の島は青き盆石をおく、某の洲崎は、娥眉をなし、某の遠山は青黛を殘せり、こゝに眼を拭ひて、扶桑第一の富士を見出せり、その樣雪の一屋を置くが如し▲雲脚下に起るかと見れば、忽ち晴れて日光眼を射る、身は天外にあるが如し▲六日の月崇高く照して、天も近きやうにて、桂の杖も折るべき心地す▲茶店の前に古川の流れて、白鷺なんど一つ二つはゞ、淺き瀬に、魚を求むるさま、をかし、岸には紫と白との藤いと美しく吹き、よる波も色にうつらふばかりに見ゆ、又傍の岸邊には、青柳の絲くりかへして春風になびくさま、妾が思斷絶の嘆にはあらねど、旅の思をさそひて、斷絶の情を催すも、あはれ深し▲のたり〳〵波はあるか無きかと疑はるゝばかり靜なる此頃の海は池なりけり▲今夜ばかりはまたもあらじ、夜深き月に、濱づたひせんとて立出るなり、月

は海こしの山の端近く落ちて、波の上は鏡の如し▲露の光さやかに、吹きくる朝風のにほひ似るもの無し▲新樹の梢には蟬の吟を聞くまだしき頃なれば、打しきるとも無く靜けさを添ふ、かしこには、かけひをもり聞ゆる、案山子のおとなひ、山にひゞき來るも、いやめづらしく、すべて耳なれぬ事のみ、我がためにや、といとかしこく、まとの知らぬ國に來たらん心地す▲長かりつる日も、いつしか入あひの鐘の聲、名殘切なる夕月、織くもかさなる青葉をわけて、漏り來る光、秋の木の間の心つくしにもまさりて庭も眞垣も風情深し▲飽かず暮れゆく黃昏の空の、おぼろなるに加へて池の面は烟りて月さし出る▲行々たる露の驛に、思を千里の雲に馳せ、渺々たる風の泊に、心を幾世の涙に碎かん、霞隔て霧を陵ぎ、立ち別るれば旅の空、雲井の外にや成りぬらん▲柳の木蔭に小川の流れて、さざれ石の洗ひたらむ如く淸らなるに、夕陽は西に沈みはてゝなほ茜色の空の雲など、奇しく妙なるが、野の裾に交はる中を、塒にかへる鳥の、黑く輪に飛びゆくさまは、いも言はれぬ眺望なり▲車窓より眺むる景色また妙なり、青山翅無くして飛び、白水脚あらざるに走る▲吾妻橋上より隅田川を望むに、江流漫々たり、風帆力無く、棹歌相應ず、溯りて綾瀨川に到る、折葦枯蘆、風物肅條、殆ど江湖澹蕩の境に入る▲鷗波万頃、房總一帶の靑山、喚べば應へんと欲す、官道の乾沙は、磯うつ波に咽んで聲あり、漁村斷續、灣を控へ陵

に據る▲斷岡小丘茅屋雞犬麥畦菜圃疎林平野盡きんとして際無し、驚心駭魄の景なきも、亦面上三斗の俗塵を洗ふに足る▲旅衣露を殘してなが月や、末野の尾花うら枯るゝ頃なれば、雲の旗手に雁がねの鳴渡るのみ、稀にも人に逢はず▲一顧すれば多摩川の流を隔てゝ、山々水にそばたち、石に咽ぶ流の音、谷に響きて人のあらそひわたるが如し。山河すべて縈糾して、數里の間に屈曲し、岑にかくれ、谷にあらはれ、「さらす調布さらくに」と詠じたる昔の歌の姿なり、山聳ては、頂に露臺の跡をとゞめ、岸崩れては石に楯澤の名を殘し、往古に戰場の樞要たるも、陰鬱たる叢澤となりて、僅に山がつの樵路をわかち、露深くして、草舊壘の礎を埋め、月さびしうして尾花白双の光をまじへ、旌旗風にひるがへりて、松に白鷺を宿し、翠桃枝をたれて、丘に弓絃の絲をたち、利鏃いたづらに田園にくじけ、寶刀空しく壤の中に埋まり、花鳥に時を感ずれば、歌舞の榮華もまのあたりにして、月に昔をしのべるときは、錦繡にはれる盛衰も、紅葉の色のうつろふに見ゐたり、殺氣長く昇平の日影に消ゐて、戰塵に似し雲も無く、人家軒をならべて、路に竈のにぎはひを列ね中禪寺の湖は一たび余が目に觸れしより後、再び忘るべからざる地なり、黑きまで濃き山の綠、骨に透りて靜かなる水の色、沈んで動かざる空氣、淋しく光る夕日、死人の額の如き冷氣、肖像の口の如く默したる木葉、人蹟を印せざる太古の苔、植物學者の

知らざる不思議の草花、凡そ此等の奇異なる感に打たれて余も亦周圍と共に沈默するの外は無かりき▲余は此沈默せる萬象を通じて一道活氣を感じたり余は始めて茲に神秘的美を感得したるが如し、此湖畔に唯獨り住みたしとの念は絶えず余が心中に往來し、神秘は常に余を待ちつゝあり、恍たり、惚たり、眄たり、倩たり▲夏の旅にうれしきものは清水▲亂濤山の如く襲ひ進み打越えて輾落し、今は海底鳴動して千輛の雷車一時に震轟せしが如く地軸も打ひしがれむばかりなり、碎けては散る波の花、萬夥の泡沫は長空に晴雪を飛ばし、天風潮氣を捲きさば巖上の松の梢に颯々の響あり▲性山水を愛し頗る間曠を樂む▲徒に勝情あるのみにあらず實に濟勝の具あり▲所謂る泉石の膏肓烟霞の痼疾▲專ら山水遊宴を以て娛みとなす▲好んで山澤の遊びをなす▲遊覽の頃吾が意の如く所を縱まゝにす▲恒に是の山水と伍をなすことを得たり▲山水の間に從容することを得て樂みとす▲名山に游び滄海に泛ぶ▲好んで山水の遊びをなし詩瓢酒榼志を肆まゝにして娛み衍なり▲良辰美景文案間隙杖を負ひ屩を躡み郊莊に逍遙す▲毎に嘉林修竹の間に從ひ紆衿方履笑詠相隨ふ▲風止み雨收り烟霞澄鮮なる毎に角巾鹿裘昆弟友生冠者五六人を率ゐて山椒に歩んで登る▲徜徉嘯傲林下の遊びをなす▲興ある時は小舟を泛べて吟嘯し古へを江山の間に覽る▲宜べなりその山水における飫まで聞いて厭まで見るや▲伴を約する若干人▲是日天晴れて雲

なく風聲淅瀝として木葉空に翻へる▲是日霧雨昏々として遠望の宜しき所にあらず▲正に新晴に乘じて出づ▲遠山縹緲明滅して烟雲際なし▲遙かに望めば頽然として積灰の如く煙雲杳靄は有無の間に在り▲頭を擧げて仰ぎ望む▲螺旋徑を通ず▲細路盤斜▲路險狹にして至り難し▲迷うて路を失ひ一田夫に問ふ▲曲行紆餘▲從容として山徑を歩す▲山に沿うて漫歩す▲歩々皆峻阪▲石を鑿ちて磴を爲ること大階の如し　輿を舍てゝ歩行し旁名勝を探る▲石磴を躡んで登る▲阪道數折▲便ち某山に登つて言ふ峻甚だし足膝心胸に點く▲山に行き水を渉る▲施々として行き漫々として遊ぶ▲道徑差平かなれば腰輿以て行き嶄崒斗に甚だしきときは芒蹻以て進む▲山を尋ね嶺に陟り必ず幽峻に造り巖嶂千里遍歷登躡せざるなし▲右に轉じ左に廻り林往き水來る▲略彴を渡り石路に登る▲衆皆難んずる色あり▲遂に荊棘を披いて行く或は側逕僅かに半武を置く▲俛して緣縟に入れば幽蔭蓊蔚歩武錯迕して出づる所を知らず▲山阻を經水厓を度り白沙翠竹の間に逍遙す▲此間竹經松緯一往幽折心甚だこれを樂む▲側徑鈎して不測の溪に出づ▲百仞の淵に臨めば汗流れて踵に至る▲道路險易嶺に陟り川を渉る▲行くこと數里夾さむに深林叢竹を以てす▲東皐に登つて舒ろに嘯き清流に臨んで詩を賦す▲池に臨んで魚を觀林を披いて鳥を聽く▲山行艮佳なり少らく此處に留まつて雪を賞し遽かに歸ることなかりき▲奇を搜り僻を探る▲芳草を藉き清

流に鑑む▲山に遨びて水に嬉む▲秋高う氣清みて長く纖雲なく甚だ登覽に宜し亦客中喜ぶべき事なり▲その險渉らざる所なくその勝窮めざる所なし▲白雲青嶂遠く相映帶して終日圖畫中を行くが如し▲水樹平遠▲林巒映帶▲烟樹微茫遠山數點▲嵐翠衣を沾す▲聊嵐輝を含み旋その宜しきを視る▲一寺院あり就いて憩ふ▲寺僧爲に館を開き湯飲を設く▲一酒樓あり登望尤も佳し▲餐を傳へて出づ▲相與に胡床に坐し杯を傳へて山を觀る▲荊を班き松に蔭してこれを久しうす▲樹下に席して苦茗を煮る▲葉を掃うて草に席す▲石に踞して仰ぎ望む▲目に千里を極む▲倦目寓視す▲目眩み意迷ふ▲悽愴超忽その心を遊ばしめて勝語を求む▲凄神寒骨幽邃を悄愴す▲薄寒體に中れば肌革慘慄毛髮肅然たり▲西山の爽氣我が襟袖に在り▲山川相映發して人をして應接暇あらざらしむ▲徘徊して刻を移す▲乃ち縮遠鏡を出してこれを望む▲一境靜寂人籟都て絶ゆ▲間山鳥と梵磬とを聞き人をして恍然として異境に造る思ひあらしむ▲その江山又天下の勝處にして樂むべきなり▲凡そ觀望浮游の美專ら茲地に於てす▲噫造物者の設け是れ久し▲身を山水の間に置きます〳〵浩然の氣を生ず▲佳境幾ばくもなく良時は再びし難し▲荒涼の地殊に清曠の致あり▲別に自から一幽境なり▲相與に遊覽の娛みを極む▲四出の山皆遠うして長江その南に在り大海その東に在り▲殘山剩水間見錯出す▲瑰奇の勝觀眞に平生に冠たり▲奇を好み事を喜び勞苦を忘れて

疾病を憚らざる者にあらざれば至ること能はず▲古より奇を奸むし士その勝を慕へどその險はしくて遠きをもて至ること能はず▲騷人の口に咏せられ好事の筆に記されたるもの盡く▲一境に萃る▲心舒び目行く▲山愈よ深く景いよ〳〵奇なり▲鳥啼き花落つ欣然として意會す▲時方に長夏青綠路を夾さみ禽鳥和鳴す▲山皆霜葉にして彩雲の中を行くが如し▲雨方に霽れたり殘雲紅樹の間に來往す▲四際邱々皆松なり▲松竹を撫し麝嶺と共に長林豐草の間に偃息す▲烟雲映發して應接暇あらず是の如きもの百餘里富める哉その山を觀るや▲兩岸悉く是奇峰にして數へ計ふべからず圖畫もて摸寫すべからず亦言語を以て形容すべからず超妙勝絕▲下に澄潭あり嗽ぐべく濯ふべし江山千里我が遐矚に供せり▲幽泉怪石遠くとも到らざるはなく到れば草を披いて坐し壺を傾けて醉ふ▲舞雩の高興▲その谿行は水皆高きより瀉ぎ下り石出でゝその間に錯出す▲流甚だ急ならず掬飲極めて清し▲人巖上を拍てば群魚巖下より出づ▲溪中絕だ魚多し時に水面を裂いて躍出す斜日これに映ずるに銀刀の如きあり▲嘉林に翳し石磯に坐し竿を投げて漁し陶然として以て樂む▲水平かなること白練の如く横たはりて巨石に觸れ滙みて大車輪となり流轉洶湧して水の變を窮む▲溪聲大風雨の至るが如▲人をして毛骨寒慄ならしむ▲その石の突怒偃蹇土を負うて出で爭うて奇狀をなすもの殆んど數ふべからず一大石連延蹲踞相望み頑狠の態狀り名づくべか

らず▲水色正緑にして澄徹鏡の如く纖鱗往來數ふべし▲江を隔て
て岡阜延袤し竹樹葱蒨し漁家相映ず幽邃愛すべし▲便風を得て帆を
帳つて行く▲乃ち船を刺して葦間を延緣す▲一舟を買うて大湖に汎
べば此身飄々として塵世の外に出づるを覺ゆ▲夜大風あり舟檝搖蕩
して通夕寐ねられず▲波濤大に起り潰淖屋の如く稍船すべからず▲
舟中笑傲して傍人なきが若し▲船樓に倚つて長嘯すれば神氣甚だ
逸し▲願くば長風に乘じて萬里の浪を破らん▲烟帆山に映じて縹緲
として畫の如し▲釣を垂れ罟を挽く者彌望たり▲漁人石に依つて罾
を挽く宛も畫圖間の見る所の如し▲漁船皆歸る▲岸に登りて漁戸を
叩き鰕蟹を買うて酒を命ず▲風帆浪船は江濤浩渺煙雲杳靄の間に出

入す▲烟雨空濛鷗鷺滅沒す▲左右幽居多く流水琮琤脩竹彌望たり▲
小樓山に面し顯る林嵐の勝あり▲山に枕み海に負く尤も曠觀多し▲
池館清麗嘯咏の樂に供するに足る▲居る所林泉の勝あり▲尤も中
秋月を觀るために宜しとす▲竹間に一小樓を作り暇あれば客とその
中に吟嘯す▲吾が心の間にして無事なるに方つて草堂に逍遙す▲樓
甚だ高からずして江山の烟雲皆几席の間に在し▲煙雲竹樹隱見して
千態なり席を下らずして盡くこれを取る▲風雲變化林麓向背▲山
あり登るべし水あり浮ぶべし▲江は以て釣すべく林は以て遊ぶべし
▲門を開けば山望むべし溪に沿へば舟挐くべし▲小山曲池逶迤とし
て映帶す▲奇を搜り勝を選んで自ら山水の間に放まゝにす▲仰いで

山を望み俯して泉を聽く▲扁舟草屨山水の間に放浪す▲林卉を擷み澗實を拾ふ▲泉石を弄し烟雲を嘲る▲日々にその朋友と詩を賦し酒を飲み山水園池の樂を盡す▲游ぶもの或は徒し或は騎しおの〳〵適する所に隨ふ▲既にして夕陽山に在り▲日既に晡を過ぐ▲夕陽山に在りて紫綠萬狀變幻頃刻恍として人目に可なり▲徒倚耽變して踵を回すこと能はず▲以て人をして樂ましめ返るを忘れしむ▲晨に往いて夕べに歸るを忘る▲乃ち來路に復る▲徐行翺佯して歸る▲初夜月出づ東嶺の松桂霜雪を蒙ぶるが如し▲遙に燈光を認め農家に至つて宿す▲夢にして游び寤めて嘆ずるものあり▲斯勞あらずんば烏ぞこの樂みあらん天下の事皆然り

嗜好

揷架して書を儲へ叉竿して畫を立つ▲擁書萬卷あり何ぞ南面百城を假らん▲春は明窓淨几の下に諷誦し夏は風檐涼榻の間に卷舒し秋冬は卷を執りて月に映じ經を繙いて雪に對す▲法書に臨み古畫を觀る▲雲の行くがごとく水の流るゝが如し▲著書家に滿ちて厥の孫謀を貽す▲風流文雅▲雛校鉛槧▲草書を能くす怪々奇々醉旭狂素の迹を追ふ▲筆を操りて之を寫し籠めて已が有となす▲之を繡にし之を繪にし塑して之を泥し模して之を鑄る▲筆力雄健にして巖々犯すべ

からず▲温厚和平の氣楮墨の間に溢れたり▲形寫變化して筆墨流動す▲燕石を以て連城に換ふ▲文は生かしむべくして死なしむべからず▲文は立たしむべくして臥せしむべからず▲歌酒戲笑倉猝漫謾の語と雖も皆都乎たる文なり▲行文圓美にして筆に生機あり▲詩は人の先天に出でゝ而して人の後天に成る▲渾成圓熟にして痕迹なし▲格律森嚴にして句度精細なり▲豪蕩邁往の氣溢れて詩となる▲性情餘りあり▲錬琢淬磨の力に乏し▲工獪の謎語にあらずば必ず勃窣の議論なり▲文壇の盟主を以て自ら居り▲流麗峭秀の詩と精妙奇逸の畫と▲小題大做▲風月の餘暇には窓に倚り案に就き書史を瞯轢し煙墨を烹煉し浩樂の到る所天機自ら發し或は雲生泉湧の文辞となり或は龍飛蛇動の筆札となる▲文酒留連して俸罄き厨寒きに至れど晏如たり▲其詩天葩を發き眞響を振ひ毫も粧飾を事とせず甚だ其人と爲りに類す▲文は性の華、言の精、其風骨必ず人品の高卑に原く▲言性情に出でず徒に格を撲し調を倣ひ黄を抽き白を聯ね繡錯彩縟纖巧自ら喜ぶものは猶悲しからずして哭し樂まずして笑ふがごとし▲毫も追琢雕繪を事とせず天籟を鳴らすものに幾し▲其書奇々怪々走蛇驚虺の如し其筆を落すに方りては心、手を忘れ手、筆を忘る妙は意を用ゐざるに在り▲……の文遒逸排蕩にして川の方に至るが如く泉の始めて達するが如く縱横變化するを海龍の出沒して蜃氣の樓臺を生ずるが如し▲……の文は厚重山の如く雄深谷の如く瑰奇鉅

麗なること宮闕の巍々たり巖廊の翼々たるが如し▲……の文は皆之を愛君憂國の誠に本づけ之を忠憤激勵の餘に發し正氣凛々と千載生けるが如く讀者をして油然と節義の心を生ぜしむ▲文學を以て名を知られ數百人を教授す▲唯精苦を以て怠らず造詣あるを期す▲聲譽遠く諸生の上に出づ▲その徒と學を講じ文を論じ邑中の俊才多く焉に歸す▲戸を闔ぢ書を讀む絶えて他の好みなし▲少うして諸生となり黌校の間に聲あり▲頗る能く書史を以て自ら娛む▲その教ふる所以は躬行實踐を以て先となす▲學に精しく文に邃し▲以て書を讀み道を談じ優游として自適するに足る▲力を學に精しうして名を世に知られ各々意見を出して自ら尺度を立つ▲游りに經業に肆らにし晨夕孜々として懈らず▲禀賦朴直にして精力人に過絶す▲四方の名士筐を負ひ業を問ふもの虛日なし▲精を殫して研窮す必ずその肯綮を得て後已む▲古人の書を讀むに往々各心に會する所あり▲平居聖賢の學を講じ躬行して倦まず▲經炊史酌の味窮りなし▲意を顯らにして學問磨礱浸灌をもて事とするを得たり▲その古今を談論するに衰々として倦まず▲師の授くる所弟子の受くる所皆その名を明かにするに在り▲その勤苦勉勵豈吾が儕少時の能く及ぶ所ならんや▲少にして俊才あり文を爲くるに意に率ひ口占して成る▲その精廬を過る毎に茶を啜り文を論ず▲文氣口を衝いて出づ疾風急雨の如し▲錦心繡口▲韓範柳執▲文章を綴屬するに思ひ流水の如し▲官を棄て

て家居し詩書文藝を以て樂となす▲職務淸簡惟詩文を以て自ら娛む▲その文馳騁萬變觀者をして心を壯にし目を駭かさしむ▲提頓鈎勒の間法度井然▲記聞淹博その筆を下すこと幽を鈎り微を剔ること他人の到る所にあらず▲その文一家を主とせず天然高邁辭約にして義豊なり▲その論著する所小大畢く學始終條貫せざるは靡く斐然として一家の言をなす▲泉石煙霞の情、篇簡に纏々たり▲文詩敏捷儁潔類に觸れ物に肖り新奇を出して人を驚かす▲匆々として筆を援れば卽ち成る意を經ざる者の如し▲爲る所の文章世俗の氣なくその樹立する所殆んど學ぶべからず▲好んで當世の事を論じ能くその得失に通ず▲細故を胸中に脫し道腴を舌端に味ふ▲語意高妙にして煙火食を喫する人の語にあらず▲特に是に區々たるは蓋し感あるに發して然いふならん▲その文博辨宏偉讀む者悚然としてその人を想見す▲これを讀むこと益す精しうしてその胸中豁然として以て明なり▲筆墨の到るところ皆波瀾煙雲をなす▲その立論藹然として詆訶排擊を事とせず▲爲る所の詩文每に眞意を以て勝を取る凌厲叫囂の習ひなし▲蓋し肺腑より出でゝ辭に彫繪なし▲諸を史冊に稽ふるに蓋し千古爽はじ▲援据精洽以て學者の神智を益すに足る▲辭鋒の向ふ所古人未決の疑ひを決す▲骨節姍々風神奕々その筆力を見る▲意眞に語朴に格老い氣蒼たり▲往々能く深く古人の精微を探つてこれを文に發す▲言は華を務めず事は虛しく設けず▲詩を作ること敏捷

にして咄嗟章を成す▲詩を爲るに高渾雅健方に三唐に駕して宋格に落ちず▲その音を託するや遙深にしてその材を取るや精確なり▲詩を賦してその牢騷無聊の志を寓す▲その窮愁感憤して罵議笑謔する所あるに至つては一に詩に發す▲日に一詩を課す甚だ此技を善くす高才と雖も甚だ習ふに非ざれば工みなる能はばるなり▲書として讀まざるはなく然れども止詩を爲るに資るのみ▲詩筆老妙なり歌詞はその餘波のみ▲鏗鏘として金石を發し幽渺として鬼神を感せしむ▲一歌一詠大抵皆愁を排し日を遣るの作▲その詩を誦するに清うして婉麗しうして靡ならず▲その情を言ふや綺麗にして佻し▲世の字句を鏤琢して以て人の耳目を眩ずるものに視れば遠し▲詩は力めて

正始を追ひ温柔敦厚これを出して窮らず▲その詩に于る情性を吟詠して悉く自然に本づく▲凡そ山川風土廢興治亂の跡友朋離合の感皆詩に見はる▲起居飲食夢寐惟詩をこれ務め六經諸史百家の說惟詩材とし是資る▲その詩肝に鏤み腎に銘する苦を見ずして一に言はんと欲する所を暢ぶ▲材を取るや窮むるに絶勝の地を以てせず畢くこれを吟卷の中に收めたり▲雅詩をつくることを喜び又山水を耽り好む▲詩を談ずるを喜び翩然として逸士の風あり▲その詩稿を取りて誦すれば琅然として金石の聲をなす▲體必ず生澁語必ず斬新▲蓋し卓然として傳ふべきものならん▲一筆にこれを勾す殊に痛快となす▲海澨に伏處し情を詩酒に寄す▲香を焚いて宴坐し吟咏して輟ず

▲嘯歌謳吟して以てその好む所を寓し終身これを樂んで厭はず▲情を放つて酒を縱にし一に諸を永言に寄す▲柳に題し花に詠じて殆んど虛日なし▲情を麴蘖に陶まして籬畔に行吟す▲琴歌酒讌吟咏自得す▲吟望の至りに任へず聊か藻を奮うて以て懷ひを散ず▲乃ち能く志を詩書に存じて辭を詠歌に寓す▲茶寮酒市題詠する所多し▲游屐の至るところ名流必ず與に酬和す▲嘗て諸友人に從うて古今の詩歌をつくることを學ぶ▲筆路暢達駸々として禦ぐべからざる勢ひあり▲筆意清潤微し肉あり▲字裏行間俱に悽惋の氣を帶ぶ▲その殘篇斷稿を雖ども猶惜むべしとなす況んやその世に垂れて遠きに行ふべきをや▲猶その風度を想ふべし況んや筆精に墨妙なるをや▲筆墨

微に造り妙に入ると謂ふべし▲余を以てこれを觀るに誠に筆に妙にして俗工の能く辨ずる所にあらず▲字瘦勁にして俗氣なし▲筆を用ゐる圓熟なるも亦得易すからず▲筆圓淨にして勁く肥瘦その中を得たり▲筆を落すこと風雨の如し▲豪勁清潤眞に天下の奇書なり▲嫵媚にして精神あり▲今人字を作るに大概筆多くして意足らず▲此翰墨は妙絶にして品なきもの▲字畫皆佳なり要するに是その人物凡ならず各風味あるのみ▲今舊刻を觀るに姿媚と雖ども造筆の勢甚だ遒なり固より名下に虛士なきを知る▲これ豈に今世翰墨の士と衡を爭はん▲此書圓勁成就いはゆる怒猊石を抉し渴驥泉に奔るもの▲字法清勁筆意皆到る▲此書を觀るに猶その風采を想見すべし▲行

草筆を下すに縱横皆意を得たり▲幼時より臨池を嗜む▲筆墨の妙は年と共に加す進む▲士大夫の筆墨を雅尚するもの多く奉じて模楷となせり▲書法妍媚一家を成す▲筆勢險勁字體新麗自ら一家をなせり▲筆實にして字畫勁し▲頗る筆中に于て力を用ゐる乃ち是古人の法▲皆翰墨の豪傑なり▲晩に乃ち草書を學び遂に一代の絶となる▲恒に圖書筆硯を以て娛となす▲その文采字畫皆自然人に絶する姿あり▲詩を工にする聞ゆある上に書畫も兼ねてその妙に臻る▲八分及び畫筆を善す皆冠絶なり▲雅趣凡ならず時工恐服す▲布置務めて新奇を求め翩々として庸鑒に儁るに足る▲その山水秀潤奇逸識者その力量氣局の壯なるを稱す▲山水の結搆緊密にして脈絡井然たり▲山水を寫すに閑散蕭疎綽として氣韻あり▲一丘一壑自らその人の胸次を須つてこれあり但筆間那ぞ得べけん▲江山寥落居然として萬里の勢ひあり▲峯巒林屋皆淡墨を以てこれをなす▲樹點石皴毫も妄筆なし▲水活し石潤ふ▲林木勁硬▲樹石秀潤▲山林泉石種々神に入る▲眞に山間の景趣の若し▲設色高古布置頗る工みなり▲隨筆落墨風味清曜世擧つてこれを雅重す▲用筆沈著設色秀雅▲筆力健勁にして氣力あり▲設色淡雅にして神氣自ら發越す▲筆力沉雄にして古逸の氣あり▲揮灑筆に應じてなる▲天機の妙筆端に現ず▲雲烟浮動の態自然に筆端にあらはる▲墨痕豐潤結搆多姿能く人望に稱ふ▲設色の清緻匠心の微妙畢く顯れて遺すことなし▲落筆整々斜々と

してその態を曲盡す▲苦學して厭かず故に頗る筆法を存す▲筆墨蒼古渲染法あり▲法を元明の筆蹟に摸してその法を得たり▲筆健に意雄にして姿態横生す▲筆法蒼老沉確謔に絶作となす▲用筆厚重骨力餘あり▲博く古への諸家を綜攬してこれを變通し自ら一家をなす▲南宋の諸家に出入して遂に一家を成す▲筆法蒼老墨汁淋漓遂に一家の風をなす▲元人に撫法し常に自ら矜惜す▲深く元明の名家を慕ふ▲宋人の法を究めて一格を立つ▲丹青の妙を窮む▲自ら機軸を出して一派をなす▲自ら機軸を出して他の元格を尸祝する者と異り▲設色古雅にして殆んど明人と席を爭ふ▲縱姿横逸にして規矩に拘らず自ら一派をなす▲直ちに宋人に法とり又諸家を折衷して自う一生面を開く▲頗る宋人の風致を得たり▲多く古名蹟を摸せり然れども敢て規倣に泥まず自ら正面を開く▲筆情秀雅識者これを稱す▲畫格老成能手と稱す▲名海内に馳せ諸士爭うてこれを慕ふ▲沖澹潤澤名を一時に擅にす▲清秀雅逸價藝林に重し▲殘練斷簡といへども皆珍惜せざるは莫し▲その斷楮零墨を求むるに得べからず▲小幀尺幅人皆藏弆して重しとす▲猶當世傳へてこれを寶とす況んやその清閑妙麗昔人の風氣を得ること此の如きをや▲藏せる所の法帖墨蹟畫卷を展べて縱にこれを觀る▲書畫に優游して吾が生を樂む▲詩酒徵逐傍ら書畫を弄ぶ▲家に祕笈古琴法書名畫を儲へて以て清鑒に供す▲自ら風雅の室に歸る▲風流爽朗▲風流歸を同じうす▲才學風流後來

の秀なり▲風流雅韵楮墨の間に寄す▲風流蕭散にして驕傲張傑の氣なし▲好んで文雅を尚ぶ流風掬すべし幽然蕭然指に應じて長言し清亮にして餘韻あり自ら身の琴中に在るを覺ゆ知らず琴の我たる歟、我の琴たる歟を▲平生の聞見する所琴に非ざるものなし書畫諸藝より世俗の謂はゆる謠曲亂舞演劇の戯に至るまで其妙を窺破して琴に於て之を發す猶張旭の草書に於けるがごとし▲朱顏白髮舉止閑雅手から香を琴案に炷して爲に數引を皷し終日清談して人をして薫風中に坐せしむ▲榻を借りて茗を啜り花木を顧眄して以て自から慰む▲將碁に玉大將軍あり握奇中に居る左右に各金銀二裨將あり馬車の二校尉爽みて之を翼け前に二龍あり左右先鋒大將たり步兵九隊又其前に排列し陳法整齊たり▲茗事に南北を言ふ點茶は北に屬し煎茶は南に屬す▲香を炷き茶を瀹し藏する所の墨帖畫卷を出して相與に品評して以て胸中の鬱結を解く▲場に上りて技を角す筋力壯健にして未だ嘗て疾病あらず▲連飲數觥歡然として暑を移す▲恒に酒を嗜み一斗を飲んで方に醉ふ凡そ朋友に在りて能く與に敵するものあるとなし既に醉うて歌へば自然に節に諧ひ其態は瑰瑋として玉山の將に頹れなんとするものゝ如し▲談渴すれば則ち茗に宜し鼎甌窰瓶汲器の屬を亭中に安き琴罷み酒闌くるに當る毎に新泉一瓶を汲み箑動いて爐は紅に松濤の颼々たるを聽く両腋習々と風生ずると覺えず磁を擧げて徐ろに啜る味は襟に入りて解し神魂俱に韻なり豈人間尚烟火

あるを知らんや▲茶の事たる地は竹下に宜く莓苔に宜く精廬に宜く石砰の上に宜く時は雨前に宜く朗月に宜く書倦み吟成る後に宜く侶は則ち雲に眠り石に跂つ人に非ずば預らず▲天下無用の尤なるものは煙草に若くはなし蓋し其物たる泊然として味なし飢うるも療する能はず渇するも止むる能はず▲余甚だ煙を嗜む讀書通じ難き際に當りて一たび之を喫すれば輙ち怡然として得る所あり▲三寸の玉板晶瑩鏡の如く五尺の身材摹寫眞に逼る眉暈頰窩全然生けるが如く袖紋衣襀宛然動かんとす竹爐火を絶たず鐺中の湯聲日夜沸々と乍ち細く乍ち大に習然と急雨の至るが如く轟然と雷車の過ぐるが如し▲酒罷みて茶は熟せり▲禪餘の暇には斯に娛游し斯に吟咏し文人墨客を斯に會す▲室を掃うて酒を命じ相與に舊を話す

戀愛

天の生せる麗質にして加ふるに朱粉の飾を以てす▲年十八九ばかり明眸秀眉面は桃華の如く都雅便慧にして絶世の美少年なり▲女名は……年甫めて破瓜才色雙絶にして又歌舞に妙なり▲花を野外に觀る途に一處女に遇ふ客華艶絶一見醉へるが如し乃ち其後に尾して行く是より晝は想ひ宵は夢み食へば則ち女を羹に見坐れば則ち女を堂に見る思戀綦だ切に自から禁ふる能はず竟に其侍辨に貨して慇懃を通ずるを得つ水魚綢繆約するに永好を以てす▲其人秀曼都雅年約そ笄

字、世家の室女にあらずば則ち侯國の宮嬪ならん倩紺炫服衣香蘭の如し▲靚粧炫服し粉面にして皓齒なり能く進退に嫻ふ▲曲眉にして便體、西施に似たるもあり玉環に類するもあり素面のものは虢姨の如く豐艶のものは紅拂を欺く▲神骨清羸にして鬢鬆れ髮長し其風貌色態愈痛みて愈麗し人間の閨秀操氷雪の如く貞は金石の如き者と雖も其一たび之を目せば安んぞ秋波一轉して慇懃を通せざるを得んや▲歌妓あり酒を逃れて風に倚り俯して流に臨す金釵髮より脫し翛然と水に墮ちたり▲桃面にして柳腰年十八九ばかり信に絶世の佳人なり▲梨花雨を帶び海棠露に泣く▲楊柳風を恨み小桃媚を含む▲眉暈りて紅を潮し眼波秋に流る▲才人たらんと難し佳人たらんと亦易からず▲數奇の才人、薄命の佳人▲琴瑟和諧し綢繆歲を卒ふ▲夜と丶もに心にかけて忘れがたきに慰むことなくて過ぎつる年頃かくて見奉るは夢にやとのみ思ひなすを得こそ聲しのぶまじけれ▲二三日へだてつ丶つれ〳〵なる夕暮もしは物あはれなる明ぼのなどやうに紛はして折々人もおなじ心にみしりぬべきほどおしはかりて書きかはすに似げなからず▲いかゞたばかりけんいとわりなくて見るほどさへうつ丶とは覺えぬぞわびしきや▲かつ見るだにあかぬさまをいかで隔つる年月ぞとあさましきまでおもふにとりかへし世の中もいとうらめしくなん▲なみだのみとゞまらねば嘆きあかして霜のいと白きにいそぎ出づれば打腫れたる目も人に見えんがはづかし▲

年頃あはれと思ひ聞えつるはかたはしにもあらざりけり人の心てそうたてあるものはあれ今は一夜もへだてんことのわりなかるべきてとふ覺ゆ▲朝夕のことくさに羽をならべ枝をかはさんと契らせたまひしにかなはざりける命のほどぞつきせずうらめしき▲うちすてられたる恨のやる方なきに面影そひて忘れがたきにたけき言葉はたゝ涙にしづめり▲誰により世を海山に行きめぐりたえぬ涙にうきしづむ身ぞといでやいかでか見えたてまつらん▲ねられぬまゝに我はかく人に憎まれてもならはぬをてよひなん始めて憂しと世を思ひ知りぬればはづかしうてながうふまじくこそおもひなりぬれ▲一夜のはと朝のまも戀ひしくおぼつかなくいとゞしきみ心ざしのまさるをなどかくおぼゆらんとゆゝしきまでなん▲さかしく思ひしづむる心もうせて▲よろづにたばからんはゞまことに死ぬべくなんおぼゆるつらかりしみありさまをなかく何にたづねけんなどいふ

花木

松、風を得れば瀟然たり幽然たり鏘々然たり笙簧を奏するが如く琴瑟を彈くが如く鳳凰の和鳴なるが如し▲樅は松葉にして柏身なり能く碩大蕃滋を致す▲密竹垂柳、紛墻畫樓を護る▲紅蓮方に盛りにして畫船の笙鼓を載せ棹を鼓して進み來るがあり▲深篁密菁青綠四圍

す▲松の用たる廣し墜露の凝然するもの土を鑽りて怒生す春に麥丹あり秋に香蕈あり皆佳味にして餐ふべし▲桃花は大觀すべくして小觀すべからず▲滿山皆楓なり爛然と霜に飽き色は渥丹の如く水巖の間に綺錯し時に墜錦ありて波に點じ杳然と流れ去る▲楓盡きて松來り水究まりて石出づ▲紅杜鵑其間に粧点し腥血滴るが如し▲山に楓樹多く霜落つる辰に當りて紅雲滿山映ずるに松杉を以てし丹碧淺深綺分繡錯たり恐らくは畫工も筆を抛たんとを▲菊は草木黃落の日に當りて風に笑ひ霜に傲り清香遠く聞ゆ▲顧ふに獨り竹を好み凡そ山巔水涯道傍籬落の處に於て之に遇はゞ其下に顧瞻して輙ち徘徊して去る能はず▲竹に直虛淸節の德あり月夜淸朗の時に當りて之を觀る

影は離々と牕欞堦壁の間に布滿す其下意に隨うて石杌几榻の屬を設け客の語るべきものあらば之を拉へて其上に坐せしむ翠陰下りて客衣に滴り鬚眉皆碧綠色を作す▲閑居事なくば則ち竹を洗すを以て工課となし得意の句に遇はゞ手に隨うて片磁を拾ひ竹靑に畫して其上に題す歲久しうして竹靑消剝して字跡皆古碑苔蝕の痕を作す隱るゝに似たり現はるゝに似たり客之を見て反りて以て韻ありとなす▲竹の物たる蕭間澹遠にして世外の韻士の如し▲梅花樹上に飲む落英風に隨うて酒杯の中に飄墜し杯は未だ唇に接するに及ばざるに梅香は酒氣に雜りて鼻より腦に入り心花頓に開く▲筍の物たる枝葉を生ぜず梃然と屈曲せず被擇に文なし▲櫻花は余に向うて活ける歷史の如

く見も、「吹く風を勿來の關」と詠じたる邊將の風神、「漣や　滋賀の都」と吟じたる忠度の高情遠韻、櫻花は余に向うて生命ある詩歌の如く覺も、櫻花は余をして人情の化身たるを知らしむ、櫻花は余をして故郷を懷はしむ▲靜なる田舍は長閑なる春の日に於て特に靜なり、幽齋に兀坐し、懷を万古に馳せ讀書に餘念無き折に、卷中に紅を點ずるものあり、是何物ぞ、仰ぎ見れば習々たる東風の窓外の櫻樹を搖かし、花片を吹きて來れるなり▲、春の花の中にて第一佳なるは、菫、秋の草にて第一佳なるは女郎花、更に佳きは、夏の撫子、三ともに可憐といふ字は下さるゝ中にも撫子は小兒に譬へらるゝ程無邪氣にして世の中の罪も重荷も無きやうに思はる、菫の如きはおのれ花なることを自覺しあるが如く見もれど、撫子はおのれが花なりや否やといふことを忘るゝ樣に思はる▲尋常一樣の撫子花も、人の庭に栽うれば既に趣を缺く、また唯山邊の松原の中などに咲けるを妙とす▲花の香は百合花よりも菊よりも薔薇よりも亦梅の香を第一と思ふ▲樹々の紅葉を仰ぎ見るに眞紅なるあり薄紅あり黃なるあり黃黑なるありそが中に靑葱として綠なるは常葉樹のまじれるなり、彼甘谷に曝すといふ蜀錦を被たるにあらずば便ち是蓬萊五色の雲かと疑ふ、秋色の目に美しく秋情こゝに閑なり▲一春寒甚だし門外の柳尙萠蘖なし▲新柳隄を拂うて寒風漸く減ず▲垂柳蔭を交ふ▲萬條垂れ下る▲水の左右田園隴畝地として梅ならざるはなし▲田間往々

に梅を見る幽馥時に來て人の衣裾を襲ふ▲村を環る皆梅なり▲前後梅を植うること甚だ多し▲老幹數圍蒼蘚鱗皴▲枝皆樛曲にして花を著くること極めて密なり▲花影倒に水に蘸し玲瓏として玉を碎く▲花の峭巖削壁の間に在る者これを望めば大瀑の雪を噴いて瀉ぎ下るが如し▲百卉芳を呈し群花爭ひ發く▲百卉芳を鬪はし衆花艶を競ふ▲隄柳眉舒び桃華艶發す▲桃李妍を爭ふ▲桃花林を爲し紛として紅霞の如し▲桃李言はず下おのづから蹊を成す▲爛々として錦繡の如し▲絹を裁り錦を剪る▲櫻花水に映じ水これが爲に白し▲花皆單瓣稠密幹皆合抱にあまれり▲花光雲影遠近相含む▲雜花樹に生じ群鶯亂れ鳴く▲某の亭花竹酷だ桃源に似たり▲花竹蕭然たり▲蒼蘚階に盈ち落花逕に滿つ▲山中花を蒔ゑ草を種う頗る自ら快しとするに足る▲晩花幽草巖壁を虧蔽す▲嘉木美卉水に垂れ峯に叢る▲嘉木は庭に樹ゑて芳草は積めるが如し▲茂樹蔭蔚として芳草隄に被ぶる▲桃李茂密桐竹陰を成す▲茂樹惡木嘉葩毒卉亂雜して爭ひ植ゑられたり▲週環藝うるに花果竹木を以てす▲野芳發いて幽香あり佳木秀で繁陰あり▲蒹葭始めて萌す▲蒲節方に來つて榴花正に艶し▲衆樹翁愛たり▲枝葉峻茂▲綠暗く紅稀なり▲樹木樛幹茅筏蒙密▲翠樾茂密▲菱荷菰葦叢然とこれを植ゑたり▲水光千頃荷香十里▲芙蓉艶を逞しうす▲小塘の芙蓉盛んに開く▲初めて發ける芙蓉は自然愛すべし▲圃中の花木交々茂し▲芙蕖菱荷の的歷たる幽蘭白芷の芬芳た

ると夫の佳花美木と列ねうゑて陰を交へたり▲桂檜松杉梗楠の植ゑられたるは幾んど三百本嘉卉美石又これを經緯す▲松杉竹箭横生倒植して葱倩相糾ふ▲桃李梅桂梧桐辛夷の属を雜植して曲直の木を架して檻となす▲水を隔つる一林皆赤しこれを視れば即ち楓なり▲滿山皆楓にして爛然として霜に飽ける色渥丹の如し▲江楓曉に落ちて林葉初めて黄なり▲蘭芷幽にして芳あり▲石蘭を疏けて芳となす▲芷蘭は深林に生じて人なきを以て芳ばしからざるにあらず▲同心の言その臭蘭の如し▲民の我を好する芬として椒蘭の如し▲蓬は麻中に生じて扶けざれども自ら直し▲五畝の宅墻下に樹するに桑を以てす▲桑の落つるやそれ黄みて殞つ▲務めて田疇を脩めて桑麻を滋植す▲麻麥雲の如し▲青々の麥陵陂に生ず▲麥漸々として芒を擢んず▲黍稷稻粱は農の慶▲稷は乃ち五穀の長▲圃畦蔬を育す▲果林の丹翠に遊び蕙圃の芬馥に戯ぶる▲嘉樹の實を擷り芳桂の英を采る▲修竹高梧曲折蔽虧す▲修竹森然として高く喬木蓊然として深し▲桂深うして冬燠に松疎にして夏寒し▲喬松數株修竹千竿▲三徑就に荒れんとして松菊猶存せり▲鉅竹千挺儼立として相持するが若し▲脩竹千竿大なるもの皆七寸圍盛夏日を見ず▲烟翠靄々として寒聲蕭然たり▲老松茂密これを望めば馬鬣の如し▲汀皆白沙矮松樾をなす▲庭院皆松を植う毎にその響を聞いて欣然として樂めり▲松の物たる地氣を極めて移すこと能はず歳寒を歴て爲に改めず▲苔草階を

沒し▲窓外の芭蕉緣を分ちて窓紗に上る▲霞みわたれる梢どものこころもとなき中にも梅のけしきばみはゝゑみわたれるとりわきて見ゆ▲はしがくしのもとの紅梅いとゝく咲く花にて色つぎにけり▲花の香さそふ夕風のどかに打ふきたるに園の梅やう〳〵ひもときて▲色も香も似るものなき程に▲かすめる月かげ心にくきを雨のなごりの風少し咲きて花の香なつかしきにおとゝのあたりいひしらず旬ひみちて人の御心ちいとねんなり▲花をまさぐりつゝ友まつ雪のはのかに殘れる上に打ちりそふをながめつ▲ちる紅梅の上に鶯のわらやかに鳴きて▲梅もさかりになりゆくおほかたの花の木どもゝ皆けしきばみかすみわたれり▲ゆるやかにうちふく風にねならずにはひたるみすの内のかをりもふきあはせて鶯さそふつまにしつべく▲月やう〳〵さしあがるまゝに花の色香ももてはやされてげにいとこゝろにくきほどなり▲紅梅いと面白くにほひ▲とけ渡る池のうす氷岸の柳のけしきばかりは時を忘れぬなどさま〳〵ながめらる▲はるばるとかすみわたれる空に散る櫻あれば今ひらけそむるなどいろいろみわたさるゝに河ぞひ柳のおきふしなびくみづかげなどおろかならずをかし▲山のさくらはまださかりにて▲若木のさくらはのかに咲きそめ▲花はみな散りみだれ霞たゞ〳〵し▲花の陰にさまよふ▲花の雪のやうにふりかゝれば▲霞がくれにちる花▲思ひある身には花の色も凄じく見ゆ▲藤山吹のおもしろき夕ばねを見て▲山吹は呉

竹のませにわざとなう咲きかゝりて▲對の前の山吹こそ猶世に見ぬ花のさきなれふさの大きさなどよ品高うなどはおきてざりける花にやあらん花やかに賑はゝしきかたはいと面白きものになんありける▲うゑし人なき春ともしらずがはにて常よりも匂ひかさねたるこそ哀れなれ▲春の花いづれとなく皆ひらけいづる色ごとに目驚かぬはなきを心短く打すてゝ散りぬるが恨めしう覺ゆる頃はひ藤の花のひとりたちおくれて夏にさきかゝるはどなんあやしく心にくゝあはれに覺ゆる▲山吹の清げに藤のおばつかなき▲横たはれる松のこだかきはどにはあらぬにかゝれる藤のさまよのつねならずおもしろし▲五葉に藤のいと面白く咲きかゝりたるを水のほとりの石に苔をむしろに詠めやる▲卯の花月夜をかしく▲垣ねの卯の花雪を欺くばかり咲きいで▲卯月ばかりの若楓▲わか楓かしはぎなどの青やかにしげりあひたるが何となくこゝちよげなる　くれ竹のいと若やかに▲きりかけだつものにいと青やかなる蔓の心ち好げにはひかゝれるに白き夕顔の花ぞおのれひとりゑみの眉開けたる▲月さし出る程にいとゝ木高き陰どもこぐらう見わたりて近き橘のかをりなつかしく▲花橘にむかしの人をしのび▲前裁の何となく青み渡れる中に常夏のはなやかに咲きいでたる▲撫子の色をとゝのへたる唐のやまとの錦をいとなつかしくゆひなしてさみだれたる夕映いといみじう見ゆ▲時雨打して荻のうはかぜもたゝならぬ▲さしぬの裾露けゝに花

の中にまじりて朝顔をりて參るほどなど畫にかゝまほしげなり▲枯れたる花の中に牽牛花のこれかれにはひまつはれて有るか無きかにはゝ咲てにはひもことにかはれるを折らせて▲まどろまずあかしたるあしたに霧のまがきより花の色々おもしろく見ゆわたる中に朝貌のはかなげにてまじりたるを猶ことに目とまる心ちす▲女郎花の一時をくねる▲かれ〳〵なる前栽の中にをばなのものより手をさしいでゝ招くがをかしう見ゆるにまた穂にいでさしたるも露をつらぬきとむる玉の緒はかなげに打なびきたるなど▲ひとむら薄▲菊に千年の秋をちぎり▲菊の花をとりて南の山を望むといひけん昔の人のしたはしく▲紅葉のやう〳〵色づきわたりて▲山づとにもたせたりし紅葉前栽のにくらぶればことにそめましける露の心もみすぐしがたう▲紅葉むら〳〵色づきて峯の上もふもとも心もいはずおもしろし▲秋の心も知らず顔に青き枝のかたゐはいと濃く紅葉したる▲梢いとことにおもしろく常盤木にはひまとれる蔦の色なども物深げに見ゆて遠目さへすごげなるを▲木枯しのたへがたきまで吹きとほしたるに殘る梢もなく散りしきたるもみぢをふみわけたるあとも見ゆず

禽獸虫魚

潭中、魚大小浮沉し突ち隱れ突ち見はる時に日已に午に向ふ同人堤上に縱飲し戲れに食餘を取りて水上に擲てば魚數十頭爭ひ出でゝ呑呷し梭躍して聲あり因りて網を善くするものを呼びて之を捕へしむるも終に能く得ること無し▲朱魚錦鱗浮きつ沈みつ潛みつ躍りつ試みに菓糕を投ずれば爭ひ出でゝ之を銜む▲小魚無數、藻に戲るゝもあり萍を咬くもあり影を顧みて自から喜ぶもあり人語に驚いて深く藏るゝもあり▲池中に石あり石上の玄龜大さ二三寸ばかりなるが頭を縮めて甲を曬せり▲春風初めて來り好鳥音を弄す▲春日載めて陽かなり鳴く倉黃あり▲綠陰野に遍くして黃鳥嚶々たり▲鳥の鳴くこと嚶々たり幽谷より出でゝ喬木に遷る▲樹木蔭を交へて時鳥聲を變ず▲日長く風暖かにして鳥哢人を娛しまず▲花木靚深にして禽聲上下す▲花木玲瓏禽鳥啾啁▲鴻往き燕來り歲序屢易はる▲燕々于に飛びて頡り頏る▲燕々于に飛びて差池たるその羽あり▲大厦成りて燕雀相賀す▲鶴は九皐に鳴いて聲天に聞ゆ▲仲秋に鴻雁來賓す▲鴻雁于に飛びて哀鳴嗷々たり▲孤游の流鴻を瞻、雲間の舞鶴を觀る▲蟬嘒々として寒吟し雁飄々として南飛す▲樹蔭を成して衆鳥息ふ▲蟬鳴き鳥呼んで山谷の氣象あり▲輕儵水を出で白鷗翼を矯ぐ▲鳧鳴無數菰を出でゝ蘆に入る▲曉霧歇まんとして猿鳥亂れ鳴き夕日

頽れんとして沈鱗競ひ躍る▲魚ば廣閑を樂み鳥は靜深を慕ふ▲魚あり數百尾方に來りて石下に會る▲鷄犬閑暇鳧鴨浮沒す▲鳧鴨を養ひ藥草を蒔く▲鷄鳴き狗吠ゆ烟火萬里▲水には魚蝦を侶とし山には麋鹿を友とす▲禽獸群を成し草木遂に長ず▲呦々たる鹿鳴▲蓼蟲辛きを忘る▲蟋蟀堂に在り歳聿にそれ暮れん▲猿狖群嘯す▲龍攣虎跂▲蛇虺の蟠まる所、狸鼠の游ぶ所▲狐狸の居る所、豺狼の嘷める所▲蛟龍虺蜴虎豹の群の抵觸する所▲猿狖の家する所魚龍の宮する所▲幽遐瑰詭の觀を極む▲猿は木を得て棲み魚は水を得て驚む▲螟蛉子あれば蜾蠃之を負ふ▲蛟龍水を得て神立つべし▲鵰螟は蚊の睫に巣くみ大鵬は天隅に彌し▲鷦鷯は深林に巣くみても一枝に過ぎず鼷鼠は河に飲みても滿腹に過ぎず▲井蛙は海を語るべからず夏蟲は氷を語るべからず▲睹ざる所を以て人を信せず蟬の雪を知らざるが如し▲雞をして夜を司どらしめ狸をして鼠を執らしむ皆その能を用ゐる▲鷙鳥の搏つには必ずその翼を戢む猛獸の攫むには必ずその爪を匿す▲猛虎深山に在れば百獸震恐す▲狸變ずれば豹となり豹變ずれば虎となる▲虎嘯いて風寥戾し龍起つて雲氣を致す▲鴻鵠清風に遡つて顥氣を凌ぎ翺翔して冥々の中に自得す▲鸚鵡能く言へど飛鳥を離れず猩々能く言へど禽獸を離れず▲老驥櫪に伏して志千里に在り▲魚は江湖に相忘る▲淵に臨んで魚を羨むは退いて網を結ばんには如かじ▲魚を得て筌を忘る▲豹は死して皮を留め人は死して名を留む

▲衆喞山を漂はして聚蚊雷を成す▲若木の梅心もとなくつぼみて鶯の初こゑもいとおほどろなる▲一聲の初音聞きもらしつと悔ゆるもあり▲あさぼらけの空に雁つれてわたる▲花を見すてゝ歸る雁▲郭公ありつるかきねのにやおなじこゑに打なくしたひ來にけるよとおぼさる▲ほどもなんなりかし▲軒近き立花の香のなつかしきに時鳥の二聲ばかり鳴きてわたる▲いとふかく茂りたる青葉の山にむかひてまぎるゝことなく遣り水の螢ばかりを昔おぼゆる慰みにてながめゐたる▲水鶏の打たゝきたるは誰が門さしてと怠れにおぼゆ▲うかひ呼びて鵜をおろさず大きなる香魚どもくひけり▲雁のつらねて鳴く聲かぢの音にまがへるをうち詠め▲月さしいでゝくもりなき空に羽根うちかわす雁が音もつらを離れぬうらやましく聞く▲月は入りがたの空きようすみわたれるに風いと涼しく吹きて草むらの蟲のこゑ〳〵催しがはなるもいとたち離れにくき草のもとなり▲風いと冷かに吹きて松蟲のなきからしたる聲もをつしりがはなめり▲前栽どもに蟲の音をつくしたり▲げに聲々聞ゆたる中に鈴蟲のふり出でたるほどはなやかにをかし秋の蟲のこゑいづれとなき中に松蟲のなんすぐれたる▲松蟲は名に違ひて命の程はかなき蟲にぞあるべき心にまかせて人聞かぬ奥山はるけき野の松原に聲をしまぬもいと隔心ある蟲になんありける▲鈴蟲は心やすく今まめいたるこそうたけれ▲木枯しの吹きはらひたるに鹿はたゝやまがきの下にたゝずみつゝ山

田の引板にもおどろかず色こき稻どもの中にまじりて鳴くも憂ひがはなり▲友千鳥もろごゑになく▲浦々とびかひつゝ▲鷹すうる手に霰たばしりて

この花集のはしがき

おのれ、先つ頃より、國文を研鑽せむの心にて、長岡無得、齋藤默蛙、山本眞猿、酒井國彦の四子と相謀り、この花會といふを創め、月毎に一回、文草を携へて相會し、互に疵瑕を見出でゝ、これを論ひ、人の文も我が文の如くに思ひなして共々に改竄し、議論なきに至りて止むを、常とせり。この會を起しゝより、はや九月、文草は積みて數冊になれり。

生成舍主人夙くよりこれを知りて、上版せむと請ひつ

るから、おのれ思ふに、會稿を世に出すは、會の本意にあらざれど、大方の指摘を得て、おのれ等が見出しゝ疵瑕の外更に疵瑕を見出して、稍完全に近き文章ともなさむは、おのれ等が、尤も望むところなりと思ひぬ。この故に、あへてその請ひを拒まず、十數篇を鈔錄して、これを與へつ。題目は會の名をさながらに、この花集とは、命じぬ。

明治三十三年五月十五日の夜、涙花この花町のかりすまひにて、

いそのゝ秋渚をるす

この花集

桃花流水

秋渚

別有天地不人間

二日三日のひづかしかりしには似で、四日といふ今朝は、一天藍を流したらんが如く、麗かに晴れ渡りぬ。桃花流水の別天地は、郊外に開かれつらん、とて游意早勃然たり。偶に遭ひたる今日の休暇を幸ひに、豫て聞きにし河内の星田、倉治の桃林へと獨り思ひ立つ。先づ關西鐵道の片町驛より發する列車の、午前七時四十分といふに乘れば、今朝の殘の夢を載せてゆら〳〵搖間に早四條畷に着きぬ。

今日も、小楠公の御祭事あれば、路の邊に朱と墨とにて、描ける菊水の提燈樹て連ねて、老弱男女の村人、右に左に往きかひつゝ、常にはなき見せもの小屋など、窺くめり。おのれは、行宮に留まりまし神輿を伏し拜み果て、やがて志す方へと、車を賃ひて、石の鳥居の前を左折して走らす。

霞みかゝれる山々の姿を遠く見て、麥の畔より鳴き立つ雲雀を近く聞きながらに行く。逢ふ人々、三々五々群をなし、各今日を晴と着飾りて、四條畷さして、赴くめり。色褪せたる紺の帽子、綿ねゝるの頸卷に、餘寒を凌ぎたる少年、偶に塗りたる顔の白粉斑々なる少女など、思ひ〳〵の粧ひ、何れか鄙の風ならぬはなき。一日圍の事を休みて、思ふゞち打連れ行く愉快は、皆の面に溢れたり。

ある百姓家の籬の中なる東おもての前栽に、床几下して、二人の垂髪少女が並び立ち、塵に雜れる土筆を堆かう積みて、小き指に、そのはかまを脱がしゐたるも、いとかはゆし。杉山あたりにて、二すぢ三すぢ摘みて、珍らしがる涙華人は、得知らぬ所なるべし。

四條畷より、二里にしては近し、といふなる星田の里に、來かゝる頃、今まで美しう彩られたる畫樣の春色は、忽ち造化の墨筆に塗り消されて、遠近の山里、見わかず。やがて絲の如き春雨斜に灑ぎ來て、風さへ勢を添へつるから、雨具持たぬ我も車夫も、しとゝに濡れぬ。疾く〳〵と、車夫を急がし立て、辛うじて、妙見山の麓に

つきぬ。雨は猶歇まず、衣の濡れたるまゝに、車を下りて車夫を嚮導に、山を上る。

先づ馬場前を行くに、一町餘打開けて、一樣の白砂自然に鋪かれて、兩側の芝生には、山櫻、八重櫻、老いたる若き、幾本ともなく列み立てるが、蕾の數々、偏に花の頃おもはせぶりなり。爰十日あまりも經ば、花の笑顔ぞ見するならん、櫻の並樹を隔てゝ、右も左も溪間の如くなりて、廣やかなる桃圃あり。花咲けること、既に三四分に及び。そぼふる雨に濡れまさりて、殊に艶なり。濡るとも花の下になど、負け惜みいひつゝ、右の方より千枝萬朶の絳雲を分けて入る。入るに從ひて、花ますゝ深し。倘し一溪の水だにあらば、此處にもまた、武陵はあり、とこそ思ふならめ。唯恨むらくは、一樣に見渡すべき處なきを。花に見とるゝ間に、何時しか、空は晴れたり。元來し路に立戻り、石磴の上なる妙見巖、山の奥なる菖蒲が瀧など、皆そこ〳〵に見なして、麓へ下りつ、倉治の花の心にかゝれば。

又も車を馳らせ、行き〳〵て、天の川の此方に到れば、東北一帶の山際、既に淡紅に見え渡れり、車夫が處自慢の話に據れば、星田より北へ一里半ばかりは、花より花に續けりとか。いと盛んなかな。かくて、橋を渡れば、家遮り、樹支へて、暫しが程は、かの山姫の袖の端だも見えず。

忽ちにして、おのが身は、倉治の桃林の口に在り、星田より一里あまりの行程とぞ聞く。車を棄てゝ例の車夫に、嚮導さす。機物神社を右に見て行くに、滿目の桃林、半ば咲出でゝ、艶を爭ひ、嬌を競へり。老いたる幹は、一屈一曲の妙ありて、花の少きを嫌はず、稺き枝は、一斜一直、趣は稍乏しけれど、花の多き取得あり。麓も圃も、花ならぬはなく、海の如く、雲の如く、花を超えて、花に分け入り、行けども〳〵、涯際知られず。衣の袖は、桃色にや染りなんとぞおもふ。花最も深き處に、圃守る翁は、住へり。花の頃ばかりは、この翁に代りて見んかとの心も起りぬ。

一叢の竹林、花を遮りて、花盛す亮やかに、潺湲たる小溪流の花を穿ちて行くも、何とやら風情添りて、劉阮の古事さへ懷はれぬ。流に沿ひて、爪尖上りに行けば、丘の上に、一軒の旅店あり、その近傍に、小々やかなる亭の二つ三つもあれど、皆荒れ果てたれば、立倚らんよしもなし。この家よ、花の爲に活計をたつるにはあらで、清暑の候、彼方に見ゆる不動堂の下なる、白き旗手の靡くてふ源氏の瀧に、うたるゝ人を待つとかや。げに荒れたるを繕はぬこそ、故ありけれ。

丘の東に攀ぢ登りて、車夫の毛布打敷かせ、携へたる行厨を開き、瓢を傾けつゝ、打見おろせば、山の圃級をなし、高き低き花叉花、菜黄麥綠、花の間を點綴し、木高き翠松花の中より、抽出でゝ、

天然の彩色、殊に優なり。花は猶半開、酒は既に微醉、風流の能事畢れり、とやいはまし。幽賞多時にしてなは、去りあへず。淋しき山里、おのれを外にしては、花尋ぬる人も來ず。聞ゆるは、雞犬の聲と溪水の響とのみなり。

日西に傾かんとする頃、惜みながらも、花に別れて、歸路に就きぬ。あはれ、この桃林の勝や、まだ世に著るからず、花神悄として、恨あるが如し、情ある人、これを訪はんとならば、來ん十二日を過すべからず

（明治三十三年四月稿）

錦城の暑さを避けて、暫しが程は、伊賀の上野の風月に、嘯傲しつゝはぞの緒切りし地ながら、久しく踏まざれば、熟路も生路の如く思ひなされて、あらぬ方へ迷ひ入るも、いとをかし。路にて稚なじみに出會ひながら、互ひに面うち忘れたれば、言葉もかはさで過ぎ行き、後にて人に心づけられて、さてはと思ふも、少からざりき。變らぬは、言葉づかひ、變りたるは、土地の樣、養蠶の業、盛なれば、殆んど家ごとに桑を栽ゑぬはなく、涼しく戰ぐ青葉の風は、昔のふりを一掃したるらし。

上野停車場（關西鐵道の）といふは、上野を北へ一里ばかりも距りたる三田村に在り。おのれ汽車を下れば、上等待合所に、一人の田の字つき紳士おはせり。黄金義歯のかゞやきに、面の威嚴を添へたるらしく、越後の帷子に、はゝまの兵兒帶、誂へ向の金鎖は、是見よかしに、だらりと垂れり。お年ばと見れば、はや三十は、去年か、一昨年かに過ぎ給ひしなるべく、ぼゝさん時代にもあらぬに、沈着椅子にも倚りたまはず、戸口を出つ、入りつ、下等待合までの御巡視は、何か由あり氣なり。歩みながら薫らしたまふ卷煙草は、まさかバアジンでもあるまじけれど、吸ひはて〻棄てたる吸口の半ば焦げたるぞ、いとも淺ましかりし。

おのれ上野に入りて、外從兄白井貞甫の家を主とせり。十疊の一室を、わが占領に任せたるあるじの心ぞ、ゆかしき。室に遍して、煙長月皓といふ（瞽牙翁が筆なり。壁によせたる一雙の六曲屏は、勿齋翁が褚遂良の禊帖を臨したるもの。共に是れ一代の名家、矧んや、舊藩の士にして、わが最も欽仰せるところなるをや。その墨痕淋漓として、雲起り、龍躍る。見ること愈よ熟して、愈よその妙詣を覺ゆ。この中に起臥して、古人を尚友しをれば、金をも爍かし、地をも裂くといふ暑さは、いづくにか。後園なる萬竿の竹風、水の如き蟬聲の、より〳〵來。

祖先の墓を掃ひ、殘り少き故舊を音づる〻序に、市街を行けば、先

づ目につくは門標なり。招牌なり。數年前までは、すべて井野流（勿齋翁）の筆のなごりを留めたりしを、今は淺ましくも浪華の何某とかいふ招牌書の惡書風傳はりて、井野流の漸く廢らんとするぞ、いと惜しき。所得稅屆濟の紙札は、半紙四つ切ぐらゐの大きさに、半谷流の肉太なる隷書、美事に見ゆれたり。

大谷子を訪ふ。子は、二十年前、猶賢社に遊びて、雪案螢燈を共にせし同心の友なり。嘗て、水滸傳を讀みて、之に心折し、盧俊義の人となりを喜び、自ら名を俊義と更め、盧が綽號をさながらに取りて、玉麒麟と號せり。その居は、丸之内の土手側に在り。桑園數畝の畔に徑して、竹樹蕭森たる間の枝折戸を叩けば、瀟灑絶塵の閑房こそ、見ゆれ。子悅びて、予を迎へ、互ひに臂を把つて、契濶を叙す。はじめの程こそ、あらたまりたれ。漸う話の進むにつけては、昔の失錯など、かたみに語りいで、共に啞々と笑ふも、隔てぬ友垣の中なればこそ。

子は、午餐ものせんとて、予を導いて、友生樓（割烹と旅舍とをかねて、本地第一位）に登りぬ。樓は、外濠に枕めり。滿濠の白蓮、紅蓮、田々たる廣葉の綠を抽きて、今を時と咲き出でたるさへあるに、一隊の鷺鳥、かしこ、こゝに、出沒して、鳴きかはしたるすべて、十分の涼味を、一樓に集めたり。

杯盤は、樓婢の手に陳べられぬ。料理は、紅棘鬣一色にて調じたり。

特に、魚生は、玉簾（玻璃の簾）の上に、切目正しく列れり。『何にもてはへんけど、食つて戴あこさ』と樓婢が十分の待遇ぶりに、主客ともに、一二盞の麥酒を傾けつ。時に青簾波だちて、清風と共に、一個の美人は、來りぬ。『今日は』と甲ばりたるの一聲の挨拶のまゝ、玉麒麟の傍に座りぬ。芳紀、二十には、未だ一つか、二つか、足らぬなるべし。何らかといへば、先づ痩せたる方にて、顏色の白きに、七難は、隱されたりと見る人もやあらん。洗髮の新蝶々、翹小さく、根殊に高く、細き銀丈長を結びとめて、白き護謨の櫛、半月と傾き、同じ花頭、一輪の小さき薔薇を咲かせて、雲鬢の上に斜めなり。淡縹の明石縮の羅衫に、對立花の紋どころは、利休鼠色絽の襦袢の襟にも、染め散らされて、帶の際まで、幅廣う見せられたり。帶は七絲緞の、まるにて、帶締は、深く隱し、帶揚をおびの眞中に結びて、結殘りを捻りて、挾け、紋付ながら、裾は、曳かであり。唯赤きは、羅衫を透して、長襦袢の色のほのめくのみ。何時も、かく紋付かと問へば、今日は棚機さまの紋日ゆゑと答ふ。その後に、三味線は、木綿小紋に緋唐縮の紐つけたる嚢に、のべなりに納れられて、横たはれり。

子、卷煙草くゆらして、笑ひながらに、是が此地の校書の標本なり、是のみか、多くは、名古屋仕入にて、中には津よりの輸入もあり。

。というて、彼方に向き、『大阪のお客さんに、何かこゝで流行るも

の、聞いていたあきさ』との吩咐の下に、絃子は、嘈々切々と嚢を出でぬ。『書生さん』も、『春の花見は、上野公園。佛性寺のさくら、夏の納涼は吳服川……』なども、『むらさきは』も『打つ水や』もくさ〳〵聞かせられて、はやたんのうしたり。日傾かんとしつる頃、二つ一（舞妓の事なり、二人にて花一本とし、これを一組とて、かくいふとかや）をも見すべしと子がいへど、今宵は、貞甫と吳服のたなばた流し見に往かんの前約あれば、これに負くは、いと心なし。既に君に依りて、此地煙華の一斑を窺ひ得つ。その全彪は、異日の樂みに留めてん。とて、猶も引き留めらるゝを、厚く謝して、辭し去りき。

この日（四日）は、陰暦七月六日に當れり。此地の俗、牽牛織女を祭るに七夕においてせずして、六夕においてすること、昔よりの例なり。されば、この夕暮に、綵箋を付けたる竹枝を、翳して、吳服川（服部川の古名なり、吳媛の來て住みたりしかば、かく名つけたり、とかや。）さして、老弱男女打連れて、たなばた流しに行くなり。おのれ、貞甫に誘はれて、黄昏頃より出で立つ。市を離れて、赤阪のくの字なりの路を下れば、一路砥の如く、両傍の稲田、青々と生ひ立ち、葉末を過ぐる夕風涼しく、行く人の袂を翻すも、こゝち快かるべし。男は、白地、女は、おもに紺地の浴衣、輕氣に着なして、多くは、うなゐに、竹枝に紅提燈吊したるを翳させて、踵を接へ

、臂を摩りあひ、魚貫して行くさま、赤坂の下より、殆んど呉服の堤まで、引續けり。堤に至れば、藩祖高山公手植の三本松のあたり、廣き芝生も狹に、薄縁敷きわたして、地口雪洞點しつらね、遊人を引く。その席、すべて塞がりて、三々五々團欒しつゝ、行厨を開き、吸筒を傾くるあり、氷らむねを呼ぶあり、酒肴を註文するありて、唯がや〳〵と打興ずめり。緑なる梨子も紅なる桃子も賣れば、有平糖にじやうせん店も賑ふ。呼びたつるのぞき眼鏡は、食氣の次に歡心を買ひて、多くの兒童を集めたり。今宵は、一年に一度のことと、夜更くるまで、人々散じ去らず。忌はしき喧嘩も起らねば、人の懐中を窺ふものもなく、洵に平和の歡樂場なり。天上には、銀河の畔、雙星のあふせもあればこそ。

貞甫と共に、おのれは、長やかなる橋の闌干に凭りて、打見やれば、幾派にか分れて流るゝ水に、皆竹枝を投げ入れて、流も堰かるゝばかりなり。貞甫いふ、かの竹枝の綵箋は、今宵の間に、穢多の手にむしり取られて、草履の鼻緒に捻らるゝなりとぞ。何れにも、廢物利用は、行はるゝものかな。とて迭みに一笑しつ。

立つこと多時、清風水の如くに來て、衣衿濡はんとす。やがて、この繁華を後にして、歸るさに、又赤阪を上る。紘聲の、彼方此方より、風に送られ來るは、何處の紅樓にか。今日を紋日と聞きしは、實にもとおもはれつ。

垂髪少女が、盆待ちかねて、今宵より踊りはじむるぞ、近頃の習はしなるとか。浴衣がけの少女が、團扇かた手に、幾人か輪になりて、手つきかはゆく踊れるをぞ見し唱ひいづるくさ〳〵の唄は、すべて、維新前の遺音なり。一闋二闋書きつけて、その上思ふよすがとせん。

わねさんたもとで、せみがおく、なんというて、
　しらはでみもちが、おいとしや。」

おまへは、おちやゝのとめをおで、いつみても、
　あかまへだれに、たまだすき。」

明日は、未明に起きて。阿保におもむき、南山を攀ぢ躋りて、今も猶、老鶯茅蜩鳴きかはすといふ種生山の仙郷にわけ入り、國見山の上に、兼好法師の墓を弔ひ、その住めりし草高寺の斷礎も尋ねて、われ慕博士の本事をつくし、別にものする所あらんと思ひたれば、今宵、吳服より蕭齋に歸るやかて、獨り燈火に親しみ、團扇に蚊軍を敗りつゝ、書きさしの稿本を取り出して、つぎ足しつ。桑の葉陰の今昔數葉の紙の盡すべきにあらず。あらまず淹留の日數も、猶數日剩れば、探墓の後に、又筆硯を洗うて錄さん時に。明治三十年、八月四日の夜、上野の煙長月皓齋に宿りて識しぬ。夜闌るにつけて、蚊軍せず〳〵威をたくましうせり。

おきな草

秋渚

仙家には、菊をたゝへて、日精といふ。げにや、さし升る我が日の本の帝室の御徽章は、この花にかたどらせ給ひて。千代に八千代に、極みもなく、榮えに榮ゆるこそ、いとも尊くめでたけれ。われ、これの愛でたき秋の花よ、九々の辰を外にして、天長の令節に逢ひ、仁風惠雨の下に、粲然たる笑の唇を綻ばすも、抑も、花の幸とやいはまし。然なり、菊もと世のつねの花ならんや。

香草龍鳳を忠正に比へて、桂蕙蘭芷に同じく取りしは、屈子の騷なり。歳寒堅貞の松と共に三徑に植ゑて、並稱へしは、陶令の辭なり。鍾氏は、五美を賦して、これを揚げたり。その圓華高く懸るは、天極に準ふなり。純黄にして、雜はらざるは、后土の色なり。早く植ゑて、晩く發くは、君子の德なり。霜を冒して、穎を吐くは、直勁に象るなり。杯中に體輕きは、神仙の食なり。菊の重んぜられたること、かくの如し。

あまつ星とあやまたるゝは、斂行が雲の上にて見し菊なり。老いせぬ秋の久しからんをことはきつるは、友則が竹の園生に、かざしゝ菊なり。紫の式部は、若ゆる袖を露にふれて、花の主人に千代を讓らんとや。僧の素性は、濡れて乾す露の間にも、千年經にけんと誇りて、後世の俊成が心を移し、山人の折る袖にはふの本歌となれり

○光を霜にまがへて、月に映ろひ、秋の籬にのみ雪とつもりて、吹上の濱には、波のよするかと見ゑ、草のあるじと詠まれしも、その句ひのゐならぬにこそはよれ。菊の愛でられたること、かくの如し。縱令萬葉の集に入らずとも、靈均の筆に洩れたる梅すらもあるをや。今や、秋晴打つゞきて、菊は、いづれの花壇にもなづさひ植ゑられて、白き黄なるとり〳〵面白う時得がほにぞ、咲き滿ちたる。翩々たる日章旗の下に、把る酒盃の底も深う、一朶の菊を泛べて、今日の令節をいはひまつるにも、わが齡さへ、延びなんこゝちぞしける。

小桃源

秋渚

天滿なる金谷氏の丹哥樓を辭してより、北桃谷にて、さる一軒の古家を借りつ。門ぎはに、年ふりたる枇杷の樹の立てるが、目じるしなり。

移り來て見れば　廣やかなる庭はあれど、いと荒れはてゝ、築山の趣さへ、殊にむづかし。尺ばかりの草、處得がほに生ひ茂りて、とび石すらも埋められたり。それをことゞくも、刈り拂はぬは、露白く、風清き夕に、蟲のこゑ〳〵を聽かむとてなり。蜘蛛のいに纏はれたる杜鵑花の枝をはらひては、來む夏の初を期し、久しく鋏刀

いれさる松の葉を洗しては、牕にさす月をさへぬ爲にす。誰が蒔きすてけむ朝顏の痩せたるが、日陰に伏しながら、二つ三つ、明朝の花を心したるもしをらしとて、竹の杖して、扶け起しつ。木の葉、かきあつめては、燒き、小石拾ひては、手水鉢の下に、水門を設けつ。はや水まきをはれば、日もくれかゝりぬ。腰なる鋏刀をおろし鍬を洗ふさへも、いたづきとは、覺ねざりけり。今宵より、樂深くなりぬべければ。

表なる三疊敷をば、我が書齋と定めつ。小さ几、多からぬ書函をば、窓の下にすゑつ。書よむにも、客に接するにも、この室ばかりなり。門前には、貴人の車を駐めこむとの望ましからねど、親しき友のおとづるゝこそ、嬉しけれ。春雨のしめやかなる夜にも、秋風の淋しき夕にも、訪ひ來て、古今を談じ、詩歌を吟じあふは、春莊ぬしにこそ。隔てなくかたらへば、心おのづから打くつろぎて、身の蝸牛の廬にあるも忘られぬ。

門を出づれば、溪間めける畑を隔てゝ、岡のべなる繁みの梢より、三舟翁の、碧山草堂見ゆ。春風長閑けき頃は、高き低き、處々に桃の花、時をたがへず。淡く濃く、霞と引きはへ、雪とふりて、この小天地をぞ染めなしける。埴生の小屋さへ、一つの風情となれるもをかし。花を出でゝ、花に入り、花に眠りて花に起くるこそ、世のうさも忘らるれ。桃に因みて、小桃源とこの地に綽號せしぞ、わが十二三年

前のすさびなりし。

故郷

ちわき

明治二十六年八月、例によりて、公の暇賜はりければ、十七年ぶりにて、故郷の土を、再び踏みけり。いわけなき時、友だち紙鳶を飛しあひ、又は、足ふみならして、力を角べし芝生は、ことゞゝく鋤かれて、田圃となりたり。連日の旱にて、稲葉打しをれたれば、水車いと忙はし。その水車するゑたる溝よ。我が割子開きし處にやあらむ。わが土筆つみし岡にやあらむ。

わが邸は、夙くより人の物となりたりしが、今は、家とては、門長屋の片隅、はづかばかり残りて、軒傾き、壁ところ〳〵落ちて、いと危げなり。かくても、人は住めりとぞ。昔は、物見の臺もあり、太くたくましき馬をも、二頭つなぎありにしを。

母上の書齋を、晴雪軒といへり。軒を繞りて、多〳〵の作樂木をうゑられたり。花の頃には、親しき文雅の友を招きて、一々花の名どころを告げ、是よりは、彼こそ優れ、彼よりは、是こそなど、品定めして、こよなう樂まれき。今來て見れば、軒のみか、一本のさくら木さへ、影を留めざりけり。跡には南瓜の蔓處得顔にはびこれるのみなり。あるじの心々にて、かくまで、變りはつるものかと、いと

あはれなり。されど、今も、母上の健かに在すこそ、いとよろこばしけれ。

天主閣のあたり、山ざくらいと多かり。今は、桃さへ添へうゑられて、公園地となれり。往きて見れば、こゝこそ昔にかはらね。わが幼時攀ぢ上りし老樹すら、さながらに立てり。見覺えある幹のなからの、大瘤も、そのまゝあり。折から、夕日西に沈まむとして、木々の葉かげの蟬時雨、頻りに懷舊の情を催しがはなり。

同牕の友、おほかたは、四方にゆきゐて、殘れるは、稀なり。また歸らぬ、旅立せしも少からず。

十七年前舊知友

半歸黃土半青雲

などロずさみつゝ、わが身をかへりみれば、頭の霜や、おかむとすらむ。あはれ。

友人某の寫眞の裏にかきつく

默蛙

君に別れて、既に幾年ぞ。世の中に、杯を含みて交る友は少からねど、涙を拭うて語る友は、多くあらず。笑語遊戯の友、求めずとも來りて、忠言鯁直の友、求めても得難し。管鮑の交の、昔にも得難かりしをおもへば、今の世に、いかで、金蘭の友の得やすかるべき。

友人某の寫眞の裏にかきつく

年は、一年と經る毎に、月は、一月と進むごとに、愁につけ、樂につけ、君をおもふこと、益す切なり。君に就いて、共に襟期を話らむとするに、天涯萬里相隔たるを如何せむ。見るは、たゞ此一片の君が寫眞圖ばかりなり。あはれ。

眞沙流

手鞠

ヒー、フー、ミー、ヨー、何やらが、どやらで、どやらが、こやら、その詞は、如聞きとらねど、これぞ、小學校の放課時間に、我が教子らが、手まりつきつゝ謠ふ聲なる。

まだ世情しらぬ少女等が、世に憂さ、つらさ、悲しさ、苦しさなどいふことのありとは、夢にも知らぬさまに、笑ひきようじつゝ、遊び戯るゝを見るときは、予は、つねに彼等と一つ心になりて、すべておのれを、忘れはつるなり。あゝ、わがうき世の波風にたゝかひまけて、彼等の間にかくれてよりは、はや二十とせになりなむとす。初の彼等は、去りて、次の彼等來る。はじめの彼等は、今はうき世の波風にもまれつゝあらむ。次の彼等も、うきよのなみかぜにもまれつゝあらむ。されど、その次の彼等、その次のかれらは、あどけなき愛らしき聲に、ヒー、フー、ミー、ヨーを謠ひつゝ、予が前に手まりつけば、予は、つねに、時の彼等と一つ心になるなり。げ

に、今のかれらが中には、昔の彼等の女兒らもあるなり。予は、いつまで、彼等の歌をきゝ、彼等の手まりつくを見むとすらむ。

花賣る翁

國彦

生駒の山のはやう〳〵白みて、荒陵山の五かさねのあら〳〵き數わかれゆくころ、先づはがらかに、聞わたるは、花賣のこゑなり。我が家のほとりに、年ごろ來なれて、顏知れる翁ありけり。御佛の供、かつは書讀む几のよそはひにもせばやと、今朝も、呼び入れて、その中より、此彼、二くさ三くさ、撰りもとめ、さて、いづこより來るかと問へば、翁ば、緒ゐたる顏にて語りいづるやう、われば、年來寺岡の里に住みなれて、里には、親よりゆづりうけたるいさゝかの花ばたけと、僅に身ひとつを容るゝあばら家とあるばかりにて、うからやからはさらなり、たよるべき子もなければ、世のたのしみとてもなし。たゞその日〳〵を、露の命として、はかなき世をおくるさま、なほこのきり花にかはらじ。若きむかしは、しか〳〵なりしが、今や髪は白く、齒は疎になりて、腰さへ屈みにたれば、行先見ゆるぞ、いとも心細き。とてやかて、立ち去りにしてそ、さびしげにいとはしく哀れなりしか。あはれ、昔をうらやみ、今をかなしみたりとて、何かせむ。時を得て、うつくし〳〵世に咲きいでむは

さらなり。よき實をもむすばまほしき事をば、花にのみあとらへつくるべきものかは。

あれたる庵に女琴彈く

無得

世に捨てられ、世をすて、、この山寺に、假の世の暫しが程の宿求めしは、三年の昔なりけり。拙かりし宿世の業をおもひめぐらすも、今は罪深けれど、さても、悲しかりしは、わが來し方。よろづ事足る家の獨娘と生れて、情ある父母の掌の珠と、愛でられ、圓き月のみながめあかしつ、、耻かしといふこと知りそめてよりは、世のならはしの夫定めにもあらぬ限のわがまゝばかり、いうて〳〵母樣困らしゝも、そも幾度。それさへ、わが願の叶へさせられて、うれしとおもふにつけても、父母の恩のたとへがたなき、わが身の果報のいみじさを、しみ〴〵と覺えたるうち、はやくも、花の如き女の子の母と、呼ばるゝ身となり、三人してながむる盛の花、めづる隈なき月、この世をわが世とあかしくらしゝも、あはれ、一場の夢なりけり。ある年の春の夜に、無慙の嵐、盛に早き蕾の花を誘ひて、はじめて、無常の世を悟りつゝも、なほ頼ある身の、慰むべきふしも、多かりしが、同じ年、野分のあるゝあした、連理の枝の空しく折れてより、いよ〳〵生者必滅の理に責められては、これも定

なき世の定まれる佛縁ぞと、起信論のおもむきいと尊く、一念こゝに發起して、翌けし年に、老いたる人たちを送りし後は、遺れる財を、その道々に喜捨して、佛の誓願む身の心安く、月より外にもるものもなきこの庵に、朝夕の勤行おこたらぬうちにも、わすれむとしても、得忘れず、捨てむとしても、得捨てぬは、かの琴なりけり。むかし母上の手馴れ給ひて、深く秘めおかれしを、われにてそとて、傳へられ、われ又わがいとし子に讓りて、花にも、月にも、雪にも、會心の友は、唯これなりけり。實にや、三代主從の契、いと深きこの琴を、看經の暇にかき鳴らすも、愚癡と、心なき人にはそしらるゝも、いとはじ。不斷煩惱卽涅槃、弘誓の船に漏れぬ身の、これも讃佛乘の因ならむ。あゝそれよ、今宵の月のおもしろさは、すぎしかの夜を、思ふかな。いざ、さらば、なき夫が常にこのみて聽きたまひしかの一曲を奏でむとて、傍の琴とりいでゝ、そなたならでは、誰に昔を斗爲巾の調をあはすよと見るうちに、忽ち彈じいづる一秘曲。いつしか、興は來りて、われにもあらで、節いと高く歌ふときには、佛前一炷の香のゆらぐとぞ見にし。

ねずみ、買

無得

今年六十一の本卦がへり、世が世ならばと、かへらぬくり言、憐とうけながさるゝは、少からねど、熱き情の涙一滴、こぼして下さるは、さても、稀なる憂きわが世を觀じても、觀ぜずとも、夢は同じ圓ならぬ身の上し婆には死なれ、子にはさきだたれ、いきがひもなき命一つ。なほいつまで絶えてあるらむ玉の緒の、切るにきられぬ宿因の、いと拙く、歎いてもうらみても、ぬらさですぐせぬ口もてる悲しさには、恥も後の世もわすられて、業もあらうに、商賣往來にもなき、いまはしのこのすぎはひ、ねずみ一匹五錢にてと、叫びあるく聲、血を吐くおもひを、知るや知らずや。口さがなき京わらんべの後う言。聞くにいさゝか、つらからねど、おもへばこれも今年は、本命にさへあたれる、ねとがしらの靈獸め、つみもあらぬにわが手にかゝりて、あへなきはてを見る今はの一聲。さすがに腸ゑぐらるゝこゝちのせられて、南無と唱ふる心のうちに、われこそかのペストとかいへるに、とりつかれて、死にたやと、おもふときの、そもやいくたび。（子の年二月十九日夜神田の宿屋にてふるひながらかくなむ）

この花集了

明治三十三年七月十六日印刷
同　年七月廿二日發行

編纂者　磯野秋渚

發行兼印刷者　大阪市南區安堂寺橋通四丁目二百三十四番屋敷　繁本良之助

發行者　大阪市西區北堀江下通一丁目三番屋敷　篠崎純吉

印刷所　大阪市北區衣笠町二番屋敷　河内谷印刷所

賣捌所　大阪市南區安堂寺橋通四丁目　生成舍

同　大阪市南區心齋橋筋一丁目　松村書店

不許複製

磯野秋渚先生鈔錄

女子 美文の栞

袖珍美製全一冊
定價金二十錢

美文を學ぶ人の爲に『美文集英』を發刊せし後猶女子に適切なる錦何繡語のあらまほしう覺ゆてやがて同じく先生を煩はしたりこの書は專ら女子に用ゐる心がまへなれど男子も書くべき事物によりては材料をこれより採るべきなり故にこの二書は互ひに離るべからず相合うて雙珍と稱すべし即ち美文の栞の目錄は左の如し

◉天象氣節（春、夏、秋、冬、日、月、風、雨、晝、夜、朝、夕、陰、晴、煙、霞）◉山水游覽（山溪、河海、瀑泉、市街、村里）◉居處園林（殿堂、室房、神社、佛閣、庭園、林石）◉人生人事（容貌、衣服、人情、病氣、哀傷、離別、旅立、音樂、雜伎、文學）◉花木禽獸（花木、花草、禽獸、蟲魚）

301378-001-4

特71-795

美文集英

磯野 秋渚／編

M33. 7

DAC-0001